
一目ボレ ～オレと『彼女』の奮闘記～

亜里沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一目ボレ 〜オレと『彼女』の奮闘記〜

【Nコード】

N0455R

【作者名】

亜里沙

【あらすじ】

バカ、アホ、ヘタレの三重苦を持つ主人公小杉捺矢こすぎとしやは、高校2年生。ある日、ペットショップで美しい毛並みの『女性』に一目ボレする。親友の内藤実ないとうみのるに冷たくあしらわれながらも、今日も元気にアタックする。しかし、一向に『彼女』は振り向いてくれない。捺矢の恋は実るのか？

本編は完結しました。現在、番外編をUPしています。

さっそく失恋！？ その1（前書き）

種族を越えた愛を目指すおバカな主人公の話です。

さっそく失恋！？ その1

一目ボレってあると思うか？

オレはそんなのくそ食らえ！て思ってた。だけど、あの日、あの時、あの瞬間。オレは確かに『恋』に落ちたのだ。

そう！あの美しい顔立ちに澄んだ瞳をもつ彼女に……

ああ！君のことを忘れた時など一瞬たりとてない。

愛してる！ジヨセフィー……又！！

「だが、そいつは犬だろ。」

冷静なつつこみ、どうもありがとよ。我が親友、内藤実君よ。おまえの一言で現実に戻ってきちまったじゃねえか。

「そんなの関係ねえ！！種族の違いがなんだ！オレ達の愛の前には障害にもならねえぜ。」

なんか、おまえアホだろっていう目で見られてる気がするのはオレだけだろうか。

「しかも一方通行。」

ぐふ……

いつも、いつもこいつは……ま、まあ、いい。今日のオレはいつもとひと味違うのだ。

え？何でだつて？よくぞ聞いてくれました！今日は今まで待ちに待った結婚式……じゃなくて新しい家族がやってくるのだ。

その名も名犬ジヨセフィーヌ（オレが命名）

ペットショップで『彼女』に一目ボレをしたオレは渋る親を説得し、ほんとはやってはいけないバイトをしまくり、今までためたお年玉を引っ張り出してお金をためた。

そして、半年後の今日、ついに時は来たり！

敵はペットショップにあり！！

ということで授業のチャイムが鳴り終わると同時にオレは鞆を持

なんか後ろの方で教師が「ホームルーム……」とか何とか言
ってた気がするが無視だ。

そして、鍵を壊さんばかりの勢いで開けると、オレは自転車にまたがった。

本来学校からペットシヨップまで自転車を駆使しても20分はかかるのだが、今のオレに不可能はない。愛の前には障害の方が勝手に逃げるものだ。

道中パトカーのサイレンが聞こえた気がしたがきつと気のせいだ。オレは自転車を放り捨てると、天国への扉を開いた。

この時のオレは、ジョセフィーヌが自分のモノになったと信じて疑わなかった。

バカな、バカな、バカな！！あの愛らしいジョセフィーヌがオス？しかもオレ以外の男に売られただトー

4

だと思つてたんだねえ。」

なんか哀れみのこもつた目を向けられてる気がするぞ！

つつか、何が「は、は、は、は」だ！

30半ばの独身オヤジのくせに・・・

オレが今日買うこと知つてたはずなのに・・・

くそ！グーで殴らせる！！今ならもれなく一発で勘弁してやる。

だが、さすがに警察のやつかいにはなりたくなかったので、そこはオレ。必死に堪える。

「で！」

「で？」

「オレの嫁、ジョセフィーヌはどこ？」

「そこ」

ちなみにオスだからね。嫁にはならないから。と言うオヤジの言葉を見無視してオレはオヤジが示した方を振り返る。そこには、目を丸くした少女とが立っていた。そしてその腕の中には・・・

「ジョセフィーヌ！」

オレはお花畑で空を飛びながら愛しのジョセフィーヌのもとへ向かう。

「ウォーン」

がぶり

がぶり？なんか、右手が痛い気が・・・

恐る恐るオレは右手を見ると・・・なんとオレの手がジョセフィーヌの口の中にあるではないですか。

「○×□〒♂♀#・・・」

そして、オレの声にはならない悲鳴が辺りに響き渡ったのであった。

さっそく失恋！？ その1（後書き）

初投稿です。さてさて、前途多難な主人公。彼の恋の行方はいかに！

さっそく失恋！？ その2

「それで、恋してた犬は別の人に買われた上に、実はオスで、終いには噛まれたってわけか。」

次の日の朝、オレは大親友の実に昨日のことを話した。そして、すぐに後悔する。

同情してくれるかと思いきや、我が親友はバカにした目でオレを見つめてくるではないですか！

「バカだとは思っていたが、ここまでバカとは思ってなかった。」
「うるせえーよ。くそ！なぜだ。オレ達は確かに愛し合っていたのに・・・」

嘆き悲しむ俺に親友は冷たい。数学の教科書を開いて、勉強してやがる。

しかも、奴は、問題を解きながら「種族どころか性別まで違えば、もはや一方通行どころじゃないな。」とか言いやがった。

なんてひどい友達だ。親友ならここはなんか慰めてくれるところだろ！

なのにこいつは・・・

「そもそも、俺たちはいつから親友になったんだ？」
とかほざきやがる。

「くそ！あの子がジョセフィーヌを買ったまでは確かに両想いだっただよ。」

会いに行けば、温かくほえられた。触ろうとすれば、よく手を引っ掻いてくれたもんだ・・・

「その結果が、その右手の包帯か。というか、どう鼻屑目に見ても、その犬に嫌われているようにしか思えないが。」

バカな！そんなはずはない。

おのれ・・・これも、なにもかもはあの子がいけない！オレが買

うはずだったジョセフィーヌを先に買いやがって。しかも……しかも……

「なんで、あの子には甘えた声で泣いた揚句、ぺろぺろ舐めて、オレには噛みつくんだよ！一体、これはどういうことなんだ！」
は！まさか、これが世に言う『浮気』というやつか。

「ジョセフィーヌの浮気者」

オレは窓を開けると、大声で叫ぶ。

オレの背後がうるさい気がするが、気のせいだ。

「お前は、だから、バカなんだよ。よく考えてみる。オスならヤロ
ーより女の子の方がいいだろ。お前だって、どんなに可愛い顔をし
てるやつでも、男だったら『愛してる』って言われたくないだろ？」

確かに、実の言うとおりだ。だが、そう簡単には割り切れない。

「初恋だったんだ……」

オレは窓に腰をかけ、ため息をつく。

なにやら、実が「犬より人間にしろよ。」とか呟いた気がするが
無視だ。

「ジョセフィーヌ……」

オレは生まれて初めて、『初恋は実らない』という俗説が本当で
あったことを痛感したのだった。

それでもオレはめげないぜ！ その1

「はぁー」

景気の悪いため息をつきながら、オレはとぼとぼと自転車を押しながら土手を歩く。

「自転車があるなら乗って帰れよ。」と実につっこまれたが、とても今日はそんな気分じゃない。

「ジョセフィーヌ・・・」

ああ、あの柔らかな肉体に触れて、心ゆくまで抱きしめ、撫でまわしたい。

そして、あの鋭い歯でオレに噛みついて欲しい。

『そこまで行くと最早変態だな』とかほざく実の声が聞こえた気がするが、気のせいだろう。

うん。きつと気のせいだ。なぜなら、オレは変態じゃないから！
・・・なんか、物悲しくなってきたのは気のせいかな？

「わん、わん！」

どこからか犬の鳴き声が聞こえる。

そう言えば、ジョセフィーヌもあんな風に毎日鳴いていたなあ。

ああ。あの楽しかった日々は一体どこへ行ってしまったのか？

思い出すと目から汗が出てくるぜ！

「あはは！くすぐりたいよ、ジョン。」

女の楽しい悲鳴と共に再び、ジョセフィーヌに似た犬の鳴き声が聞こえてくる。

ケ！なにが『ジョン』だ。バカらしい。

オレはなんとなく声のする方を見た。

そして、その姿を視界に入れた瞬間、体がまるで金縛りにあったかのように動かなくなった。

そこにいたのは・・・

「ジョ、ジョ、ジョセフィーヌ!!」

オレは自転車を放り投げるとジョセフィーヌのもとへ走り出した。きつと、今オレはお花畑を飛ぶように歩いているのだろう。

今のオレに不可能という言葉はないぜ!

「ジョセフィーヌ。」

オレの声に気付いたのか、ジョセフィーヌはオレの方を振り返った。そして、オレに向かって走ってくる。

「わお〜ん」

やはり、愛し合う二人の間に障害など無い!

一度は別れることになったが、愛の力により再び出会い、そしてキ・・・

がぶり

がぶり・・・?なんか嫌な予感がするぞ。

オレは恐る恐る、痛みを感じる左手を見ると・・・

うわーい!見事にジョセフィーヌの小さくてかわいらしい口の中にオレの手があるぜ。

さあ、みなさん一緒に!

「○ □ 〒 ♀ # ! !」

オレは、2度目の声にはならない叫びをあげたのだった。

それでもオレはめげないぜ！ その1（後書き）

今日も、主人公はジョセフに噛まれています。

それでもオレはめげないぜ！ その2

「これで大丈夫だと思います。」

そうオレに笑いかける少女は加藤香澄と名乗った。

彼女はオレの手の包帯を巻き終えた後、「ちよつと待っていてくださいね。」と席を立った。

一体全体、なぜこうなったのだろう？

確か、手を噛まれてのたうちまわっていたオレに彼女が真っ青な顔で謝って……

そうだ。怪我をさせたお詫びにとか言っつて、家まで連れてきてくれたんだっけ。

そんでもつて今に至る。

今オレがいる部屋は、自分の家とは比べようがないほどきれいに整頓された客間だった。

そして、なぜかオレの傍でジョセフィーヌがうなり声を鳴らしながら、オレを睨みつけている。

何故だ！オレ達はあんなに愛し合っていたではないか。なのに、なぜそんな怖い顔でオレを睨む？

「あの……紅茶をいれたんですけれど、どうですか？」

すると、どうだろう！なぜか我が愛しのジョセフィーヌが甘えた声で鳴き、加藤香澄の足にすり寄っていくではないか！！

加藤香澄はジョセフィーヌに微笑みかけた。

「ちよつと待ってて。今、これを置くから。」

そう言つとオレの前に紅茶を置き、オレの真正面に座る。

すると、なんてことだろう！あることが、ジョセフィーヌはオレではなく、あの女の膝の上に乗ると、小さい子供のように（実際

に産まれてまだ1年にも満たないのだが）彼女に甘えているではないか！！

何故だ！何故、オレよりもあの女を選ぶ！

「認めない！」

「はい？」

突然のオレの叫びに彼女が目丸くする。

相変わらず、ジョセフィー又はあの女に甘えている。うお！彼女の頬を舐め始めたではないか！なんてうらやましい・・・くそ！！
「認めんぞ——！！」

叫ぶと、まだ熱い紅茶を口の中に詰め込み、オレは彼女の家を飛び出した。

くそ！口の中が熱いぜ！

やけどしたかも・・・

それでもオレはめげないぜ！ その2（後書き）

へタレ主人公の一日がようやく終わりました。
さてさて、次回はどのような事やら。

お前はオレのライバルだ！ その1

次の日の朝、オレは教室に入るや否やまっすぐ実の席に向った。
実は毎朝7時30分には学校に来て勉強するという素晴らしい習慣がある。今日もこいつは数学の問題集を広げて勉強していた。

「実」

オレが実に抱きつこうとすると、「死ね。」という実の言葉と共にゴンとどこからか音がする。

ん？なんか頭が痛いぞ。しかも、だんだん意識が遠くなっていく・・・

そこはお花畑だった。

『うはは、ジョセフィーヌ』

『わおーん』

愛し合うオレ達はお花畑の中で仲睦まじく過ごす。

ああ、なんて幸せな日々なんだ。もう、死んだって後悔しないぞ。

「いい加減に起きろ、バカが。」

べし！という音と共に急速に世界がゆがむ。

『ジョセフィーヌ』

オレは必死にジョセフィーヌの方に手を伸ばす。

ジョセフィーヌも必死になってオレの方に向かってくる。

そして・・・

がぶり

「ギャーーーーー」

「うるさい。」

バコンと頭を殴られる。

そこでようやく我に返った。

「は！ここはどこ？オレは誰だ？」

辺りを見回すが、全く覚えのない部屋だ。しかもなぜかベットの
上にいる。

「いい加減にしろ。ここは保健室だよ。全く、たかが広辞苑の角に
当たった位で気絶しやがって。」

なんか今、さらっと恐ろしいことを聞いた気がするんだが……
「あ、思い出した。」

そうそう。俺の名前は小杉捺矢、17歳。我が愛しのジョセフィ
ーヌの彼氏で……

「そうだ、実！オレ、お前に話があったんだよ。なのに途中で意識
が無くなって……」

あれ？一体どうなったんだ。なんか、さっきから頭のとっぺんが
痛い気がするんだが。

「……多分、寝不足じゃないのか。急に意識をなくしたんだ
よ、お前は。今は昼休みだ。」

「昼休み！？そんなに寝てたのか。」

オレが意識を失う寸前までの時間は確か8時。んで、昼休みは1
2時30分から始まるから4時間30分も寝ていたのか。おかしい
な。昨日は10時に寝て、6時に寝るという8時間睡眠をとったの
に。どっか体長でも崩したのか？

「それで。お前の話って何なんだ？」

おお！いかん。忘れるところだった。

オレは実に昨日の出来事を包み隠さず話したのだった。

「お前、脳ミソに蛆でも湧いてるんじゃないのか？」

話し終えた後、実は大きいため息をつきながら酷いことをいいやがった。

「なんでそうなるんだよ。いくらオレでも傷つくぞ。」

だが、実は冷たい眼でオレを睨む。ちよっ！なんか無茶苦茶怖いんですけど。

「わざわざ自業自得で怪我をしたお前をわざわざ家にまで招いて、しかも介抱までしてくれた人に対する言葉が『認めんぞー』って・・

・誰がどう考えてもお前の頭に蛆が湧いているとしか思えん。」
地の底からはいずるような声ってこういうのを言うんだなあ。オレ、初めて知ったわ。

そうだよ、そうだよ。さすがにオレも悪かったなーって反省してるよ。

うう・・・色々反論したいのに言ってることは正しいから反論できない。

「病院行って、その腐りきった脳でも見てもらえ。」

もっとも、手遅れだろうがな。という余計なひと言付き。

「うるせーよ！反省してるよ、ちゃんと。」

そうとも、いくらジョセフィーヌを取り合うライバルだからと言って、仮にも手当てをし、お茶を出してくれた恩人に礼を言うどころか、訳の分らん叫びをあげて飛び出して行くなんて・・・人としてどうなんだと思う。

・・・なんか、自分で考えて悲しくなってきたぞ。

そう言えば、それ以前にオレは彼女にどう思われたんだ？うわ！変人とか思われたらどうしよう。

「むしろ、恩知らずのサイテー男と思われたかもな。」

実の冷たい言葉が胸に突き刺さる。

いかん。それはいかん。このままではよくない。

ということ、オレは放課後、もう一度彼女の家を訪ねることを決意したのだった。

お前はオレのライバルだ！ その1（後書き）

登場人物のまとめ

主人公：小杉捺矢^{こすぎとじや}・・・難関高校日向学院2年生。顔はいい。

頭も一応良い（学年で

は上位にいる）

^{ないとうみのる}

ツッコミ：内藤実・・・捺矢と同じクラス。腹黒。

ヒロイン？：ジョセフィーヌ（ジョン）・・・コリー犬。オス

飼主：加藤香澄^{かとうかすみ}・・・16歳

いつかちゃんとした登場人物？のページを作るかも。

お前はオレのライバルだ！ その2

放課後、オレはありったけの勇気をかき集め、彼女の家を再び訪れた。

そう、訪れたは良いが、なかなかインターフォンが押せない。

オレも愛と勇気だけが友達な生き物になりたいかも・・・そう言えば、前から疑問だったけど、奴って生き物なのか？それに、風呂はどうしてんだ？は！まさか入っていないのか。それだったら、奴の顔はかなり不衛生じゃないのか？そんなものを食べさせて元気になるなんておかしいだろ。

つと、そんなことを言っている場合ではない。

大丈夫だ、オレ。オレならきつとできる。I can fly！
つて、何考えてんだよ。とにかく行くぞ！

オレはゆつくりとインターフォンに触れようとした。

「あ、小杉さん。」

びくり！

恐る恐る後ろを振り返ると、そこには最も会いたくな・・・いやいや、会わなければならない人物が小首を傾げ、不思議そうな顔をしている。

ん？なんか、心臓の音が聞こえてくるぞ。なんでだ？

「どうしたんですか？」

どうしたって・・・くそ！男、捺矢^{とじや}、ここで逃げるわけには行くもんか！

「あの、昨日は・・・」

がぶり

ん？『がぶり』とな？なんかお尻が痛い気がするんだが・・・
嫌な予感がしつつも振り返り下を見ると、愛しのジョセフィーヌ
がオレのお尻に噛みついていてはいないか。

おお、ジョセフィーヌ、お前は どうしてジョセフィーヌなんだ・・・
・・・？

そんな意味不明なことを考えながら、オレは毎度お馴染みの悲鳴
をあげたのだった・・・

お前はオレのライバルだ！ その2（後書き）

• なんだか主人公、1日1回は何らかの叫び声をあげている気がする。
•

お前はオレのライバルだ！ その3（前書き）

今日も主人公はへたれてます。そして変態です。

お前はオレのライバルだ！ その3

「本当にごめんなさい。」

香澄ちゃんには目に涙をため、土下座せんばかりに謝る。

「いや・・・大丈夫だから。」

そう言うオレの声は弱々しい。

あの後、悲鳴をあげるオレにジョセフィー又は離れることなく、そのかわいらしい口でオレの汚いお尻を噛み続ける。そんな『彼女』を香澄ちゃんが必死になつてはがそうとした。

だが、なかなか『彼女』は離れない。仕方がないので、とりあえずオレは再び彼女の家の客間に通され、ありとあらゆる手段で引き離そうとした。

本当に手段を選ばなかった。思い出すだけで涙が出てくる。オレのお尻の命は今日で最後かと思つたさ！

意外と香澄ちゃんって、可愛い顔して、すごい性格の子なんだなあ。

そんなこんなでオレが噛まれてから軽く1時間が経過していた。あれだな。もう一生このままでいい気がするぞ。

ん？一生つてことは何か？お風呂に入る時も、寝る時も、学校に居る時もオレ達は一緒ってことか？

オレは愛するジョセフィー又と1つになる。なんだか甘美な気持ちになつてきたぞ。

うわー、やっぱー。鼻血出てきた。

その時だった。

「もういいわ。ジョンは私のことが嫌いなね。だったらその人と

一緒に帰りなさい。もう、帰ってこなくていいから。」

とても冷たい声音だった。だが、オレはその言葉を聞いて初めて彼女に好感を持った。

そうと決まれば話は早い。このまま二人だけの愛の巣へいざ行かん！！

そう思い、オレは部屋から出ていこうとした時、急にお尻から痛みが消えた。

「あん！」

聞いたことがないほどの甘い声。

恐る恐る顔を向けると・・・そこには信じられない光景が目にとった。

なんと、あるうことかジョセフィー又は瞳をうるわせながら香澄ちゃんの方へすりよっているではないか！しかも、くすぐったそうにしている彼女の顔を舐めまわしている。

「あはは！くすぐりたいよ、ジョン。」

嬉しそうに笑う香澄ちゃんと、これまた嬉しそうに彼女の頬を舐めるジョン（・・・）になんだか胸がムカムカしてきた。

ちよつと待て、それはオレにこそしてくれるもんだろ！！

「認めんぞ - - - - -」

- - -

後ろで香澄ちゃんが何か言っていた気がするが、それを無視してオレは彼女の家を飛び出したのだった。

お前はオレのライバルだ！ その3（後書き）

捺矢の恋愛は一体どうなるんでしょうね〜

誰かオレに学習能力を！ その1（前書き）

どうもupしたはずなのにされてなかったみたいです。すみませんでした。

誰かオレに学習能力を！ その1

「みのる」

次の日の朝、教室に入るとオレは実に向かって抱きついた。

「死ね。」

ゴンという音と共に頭に痛みが走り、オレは頭を押さえながらその場に座りこんだ。

ん？なんか今、デジャブを感じるんだが気のせいかな？

「ちーやはり、手加減して教科書を投げただけじゃ死なないか。」

なんか今、さらつとすごいことを言われた気がするんだが・・・は！それよりも昨日のことだ。

「実〴〵聞いてくれよ・・・」

事情を聴き終えた後の開口一番の言葉は冷たく一言、「お前には学習能力がないのか？」でした。

「反省してます・・・」

無茶苦茶してますとも。もう、思い出すたびに恥ずかしすぎて穴があつたら入りたい気分になるよ。

むしろ、スコップ持って今から掘ろうかなあ。

「お前は昨日、何しに行ったんだ？」

なんか、実の言葉が何時になく冷たいんだが。あいつの後ろからブリザードが吹き荒れているように見えるのは気のせい？

「お前、病院・・・いや、どっかの研究所に行つて脳ミソに学習能力をつけてもらえ。」

酷い！！そこまで言わなくても・・・

「だから、反省してるって言ってるだろ！オレが言いたいのは、これからどうしたらいいのかってことだよ。」

彼女に落ち度など一点も一ミクロンもない。全て自分がいけない。それくらいわかってる。

「ふん。まあ、まだ悩む気持ちがあるだけ救いがあるのか。」

なあなあ実君よ。君、さっきからオレの扱い酷くないですか？

・・・まあ、多分きつと一応、こいつの言うことは正しいので反論できないんだが。

「それで、オレはどうしたらいいと思う？」

なんかもう泣きたくなってきた。

そんなオレにあいつが言った一言は、何と「死んで詫びれば。」だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

死ねと？あなたはボクに死ねとおっしゃるんですか？

それはつまり武士らしく切腹しろとのことですか？

って、オレは武士じゃねえ！ああ、でも、そんなだけのことはやりちまったしなあ。

おお、神よ。我を救いたまえ！

「・・・なんで、俺はお前と友達やってるんだろっな。」

もつともな質問、どうも！

って、それはこっちのセリフだ！！

・・・なんかもう悲しくなってきた。オレの運命はどうなるんだ？

誰かオレに学習能力を！ その2

そんなこんなで今日一日、オレはブルーな生活を送ったのだった。

「おい、何時まで凹みながら黄昏てるんだ。」

冷たい実の一言でようやく放課後になったことに気がついた。

一体、今日一日何してたんだろう。やペー、記憶にない・・・

「ああ、確か先生たちに注意されたり、叩かれたり、チョークを投げつけられたり、置物で殴られたりされても、気付いてなかったな。」

「って、ちよつと！誰か止めようよ。死ぬよ、それ。てか、オレ、よく今生きてんなあ。」

「頭がそれだけ石だつてことだろ。」

ねえ、実君。君、もしかしてオレのこと嫌いですか？

「何をいまさら。ほら、バカなこと言つてないで帰るぞ。」

え？何をいまさらってどういうこと？うおーい、置いてくなあー
オレは慌てて実の後を追う。

ん？でも、よく考えたら、オレ、声に出してなかったのによくオレの心の声がわかったなあ。

は！まさか実はエスパー・・・

ゴン！

見事、オレの頭に教科書の角が当たった。

「バカなこと言ってるなよ、アホが。全部声に出してんだよ。ついに耳までおかしくなったのか。」

うわーい。なんかものすごくさげすまれてる。

ん？なんか、快感を感じるんだが・・・オレって、もしかしてかなりやばい？

「そんなもん、いまさらだ。」

そう言つと、実はスタスタ歩き去っていく。

「え？ちよ、ちよつと待つて！置いてくくなあゝ」

半泣き状態でオレは実を追いかけたのだった。

誰かオレに学習能力を！ その2（後書き）

知らない間に、アクセス数が100を越えてました。
いつもありがとうございます。

誰かオレに学習能力を！ その3

何とかオレは実に追いつき、一緒に帰ることになった。

まあ、一緒に帰るっていても実は徒歩10分の所に家があるのですぐに別れるんだがな。

ちなみにオレの家までは自転車で40分かかる。結構遠いんだよなあ。実がうらやましい。

徒歩の実に合わせて、自転車を押しながら、あいつの横に並んで歩く。

「おい、あの子、金蘭学園高校の子じゃないか？」

金蘭学園って言ったら、超エリートお嬢様学校ではないか♪

オレは実が差した方を見て・・・固まった。

知ってる・・・あの顔はここ最近よく見るものだ。

相手もすぐにオレのことに気がつく、今のオレには致命傷を与えることができるほどの明るい笑みを浮かべて、こっちに手を振る。

「ご・・・ご・・・ごめんなさーい！！」

半泣き状態でそう叫ぶが早いか、自転車にまたがると、その場を一瞬で消えてみせるという芸当をして見せた。

まあ、実際はものすごいスピードで走っただけなんだがな。

家に帰って時計を見るとびっくりした。なぜなら、通常40分かかる道のりを5分5秒で帰ってきたからだ。人間の限界を越えたな、とか言う訳の分らん現実逃避をしながら家に入った。

「ふうー」

さすがに疲れたので、今にあるソファの上に寝転ぶ。

「おかしいなあ・・・」

「兄さんがかおかしいのは今に始まったことじゃないじゃん。」

この無駄に生意気な声はよく知ってる。ああ、知ってるとも。何せあいつが産まれた時から聞いているからな。

オレは体を起こすと、声の主を睨んだ。

案の定、声の主はオレの妹、咲だった。

現在中学2年生の妹はこの上なく生意気だ。しかも、この偉大な兄を兄とも思っていない。

睨むオレを無視して、咲はアイスを食べながら、あるうことが、兄であるこのオレの足の上に容赦なく腰をおろしやがった！

無茶苦茶痛いぞ！

「何しやがる！このくそガキ。」

怒鳴ってみるが疲れ切ったオレの怒りはあまり妹には通じなかったようだ。咲は涼しげな顔でアイスを食べ続ける。

う・・・う、学校では実に、家では妹（両親）にいじめられる。泣いていいかなあ。

半泣き状態のオレを無視しながら咲は尋ねる。

「で、何がおかしいの？まさか兄さん、テストで赤点でも取ったの？」

「そんなわけあるか！」

言つとくけどな、誤解されやすいけど、オレはかなり頭が良いんだぞ。

確かに時々、いや、しょっちゅう・・・たまに？とにかく、今みたいに実にバカにされるくらいバカな時もある。が、勉強に関しては我ながら良い方だと自負している。

どれだけ良いかというと、テストで90点以下を取ったことがほとんどないくらいだ。

どうだ、すごいだろ！バカにされたって、結構いけるんだぜ！

「そうなんだ。ま、兄さんは頭だけは良いもんね。頭だけは。」

うわ！こいつ、2回も言いやがった。ふざけんな。スポーツだってできるわい。

でも、こいつにこう言われる理由に心当たりが・・・

ああ、また涙が出そうだ。

「もしかして・・・兄さん、恋したりしちゃってる？」
ぐほお！

やべー、今、口から出てはいけないモノが出てくるところだった。
つか、何を言い出すんだ、このくそガキ。無茶苦茶動機が激しい。
そんなオレをみて、我が、可愛げの欠片もない妹はぷつと噴き出した。

「あはは、まさかね。兄さんが恋だなんて、天変地異があってもあり得ないわ。」

おい、妹よ。お前は自分の兄をなんだと思ってるんだ？

咲はアイスが食べ終わり満足したのか、オレの上からどくと、とつと出ていった。

一人残されたオレは深くため息をついた。

未だに両手にはジョセフィー又との愛のあかしとして刻み込まれた傷が残っており、包帯が巻かれている。

最初、これを見た両親はジョセフィー又に噛まれたことを話すと大笑いした。いや、大笑いという言葉では表現できないほど腹を抱えて笑いやがった。

今でも、この包帯を見るたびに笑いやがる。くそ！なんてひどい親なんだ。

ふと、頭に浮かんだのは先ほどの香澄ちゃんの驚いた顔だった。
いや、まあ、あんな奇行をしないと驚くなつて方が無理なんだろうけどさ。

「はあー、何やってるんだろ、オレ。」
男だろ！しっかりしろ！！

「よし、明日こそは香澄ちゃんにちゃんと謝罪して・・・」
ジョセフィー又との交際を認めてもらうのだ！！

なんか、間違った方向に走っている気がするが、気にしない。
オレは決意を新たにソファァーから起き上がろうとして・・・見

事に落ちた。

誰かオレに学習能力を！ その3（後書き）

さて、捺矢の運命はいかに！

実のデートをぶち壊せ！ その1

次の日の放課後、結局一日中悩んだにもかかわらず一人で謝りに行く勇気が足りなかったため実に同行してくれるよう頼んでみた。

「ああ、俺、今日その子とデートだから。」

「……………はい？今、なんておっしゃりました？

目を点にして茫然としているオレに親友だと思っていた男は淡々と話を続ける。

「昨日、お前が奇声をあげて逃げ去っていった後、加藤さんと仲良くなつてな。今日、これからデートの約束をしたんだ。」

デートの約束をしたんだ……………約束をしたんだ……………したんだ……………」

「ぬぁにー……………！お前、いつの間にそんなことを！」

「だから、今言っただろ。お前が奇声をあげて……………」

「そこはいい。」

「というか、思い出したくない。タイムマシンが今ここにあるならば、あの時の自分を殴りに行きたい。」

「わかった。じゃあ、『お前が』奇声をあげて全人類が理解不能な行動をとった後、」

「うわー、こいつ言いなおしやがった。しかも前より酷くなってるじゃん。ていうか、『お前が』の所が強調されてた気がするんですけど……………」

「んで、香澄と仲良くなって、これからデートの約束をした。以上。」

「ん？今、お前なんつーた？『香澄』だと？何呼び捨てにしてるんだよー！！

「ここで、オレの中の何かが切れた。」

「ちよつと待てー！！何でさっきは加藤さんだったのに今度はか・

か・・・か・・・」

「香澄。」

「正解！」

そうじゃねー！しかも、外に向かって叫んでるよ。何がしたいんだ、オレ！

「おい、窓から叫ぶな。ただでさえバカだと全校に知れ渡っているのについて気が狂ったと思われるぞ。全人類に。」

え？全校にはなくて人類規模ですか？って、全校の奴らにオレがバカだと思われてるわけ？どんだけ有名よ、オレ。

「じゃ、そう言うことで。」

「ちよつと待て！何が『じゃ』だ、何が『デート』だ、何が『奇声』だ！！」

なんか、話してる自分も訳が分からなくなってきたぞ。

だんだん混乱していくオレをそちのけであのヤロー、スタスタ歩き去っていきやがった。

サド！ドS！腹黒メガネ！！（実は時々メガネをかけるのだ。）
何が、メガネをかけた方が先生受けがいいだ！目はいいくせに。
クソ！こうなったら復習・・・いや、じゃなくて復讐してやる！
オレの全てをかけてこのデート、邪魔してやるのだ。

そう決意したオレは背後に黒い炎を従えながらドS実の後を追ったのだった。

実のデートをぶち壊せ！ その1（後書き）

さあ、捺矢は実のデートを邪魔することができるのか？
次回もお楽しみに！

実のデートをぶち壊せ！ その2

とある公園で、なんと香澄ちゃんがオレの愛するジョセフィーヌを連れて立っているではありませんか！

ああ、相変わらずなんて美しい毛並み・・・凛々しく整った顔・・・って、こら！何でお前はそんなうれしそう中で香澄ちゃんの足にすり寄ってるんだよ！

ちなみに、オレはどこにいるかというと、聞いて驚け、見て笑え！我ら閻魔大王さまの・・・って、違う違う。えーと、なんだっけ。そうそう、オレがどこにいるかだった。気を取り直してもう一回。聞いて驚け、見て笑え！なんと近くの茂みの中に隠れ、植物と一体化して隠れているのだ！

・・・なんか、悲しくなってきたなあ。まあ、前置きはどうでもいい。そうこう考えている間に実の奴がもったいつけた様子（脳内の実が「お前の気のせいだ」とかつつこんでるが無視だ）で香澄ちゃんのもとへ向かっていく。

「遅くなつたな。」

なんつーぶつきらぼうな言葉。しかし、香澄ちゃんは極上の笑みを浮かべて首を振る。

ああ、そんな笑顔、実ごときに見せなくてもいいのに・・・

「うんうん。私も今来たところなの。」

うわぁー、月並みなセリフ。って、おい、ジョセフィーヌよ。何故にお前も嬉しそうに尻尾を振ってるんだ？は！まさか、こんな陰険腹黒メガネの方がオレよりもいいっていうのか。

「じゃ、行こうか。」

ん？オイ、コラ、実！！テメエー、何、何気なく香澄ちゃんの

肩に腕をまわしてるんだよ！！

クソ！一番気に食わないのは、これだけ下心丸出しの實に対して『ジョン』の奴が全く怒らないことだ！

オレが香澄ちゃんに触れようもんなら、すさまじいまでの殺気を放ちながらオレを睨みつけ、ついでに噛みつくくせに・・・

って、ちよつつつ！！なんで、香澄ちゃんも嬉しそうなわけ？

いくらなんでも隙がありすぎでしょ。知らない人にはついて言ったらダメって先生に言われてるだろ！！

あ、いや、知らない仲ではないのか？いやいやいや、知らない仲ってなんだよ、オレ。それって、二人がそこまで行っちゃってるってことじゃん。って、そこまでってどこまでだよ！！ああ、もういい加減にしろよ。戻ってこい、オレ！

とか何とかオレが混乱している間、どこからか犬の鳴き声と少女の悲鳴が現実世界では響いていて・・・

がぶり

えーと、『がぶり』？

なんか嫌な予感がするなー

オレはそろそろと音がした方に首を回す。

おお！なんか、愛しのジョセフィーヌの瞳がオレを見つめてるじゃないですか。あれ？ジョセフィーヌさん、あなた、一体どこに噛みついていらつしやるんですか？

オレふと偉大な先人が残した『2度あることは3度ある』の言葉を思い出した。

2度あったことは必ずもう1度繰り返されるものだから注意しようね、という意味。

でも、先人様。4度もあった場合はどうしたらいいでしょうか？いっそ、「3度あることは4度ある」に変えてしまった方がいい

のではないでしょうか。

などと、訳の分らんことを考えながら、オレは最近お決まりの、
しかも、4度目の悲鳴をあげたのだった。

実のデートをぶち壊せ！ その2（後書き）

「聞いて驚け見て笑え。我ら閻魔大王さまの一の子分」
某局の某アニメの鬼たちのセリフです。

意外な真実 その1

「ごめんなさい・・・本当にごめんなさい。」

涙目で何度も頭を下げる香澄ちゃんをオレは慌てて止めた。

「気にしないでいいよ。オレってさ、結構頑丈なんだよね。」
半分本当で半分嘘だけだね。

直りかけていたはずの左手はジョセフィーヌに再び（しかも今度
は前回よりさらに深く）噛まれたため、仕方がなく病院に行った。
「あら、君だけ犬に噛まれたの？そりやまた、災難だったわねえ」
どこぞのおばさんみたいなお医者様は豪快に笑うと、オレに全治
2週間との診断を言い渡した。

んで、現在、病院の帰り道の途中。オレ、実、香澄ちゃんの3人
で並んで歩いていた。

「その通りだ。気にする必要なんてない。全てこいつが悪い。」
そう言いながら、このイケメン腹黒メガネは優しく・・・そう、
誰がどう見ても優しく、まるで恋人に対してするかのように香澄ち
やんの肩に手を置きやがった。

「おい！」

てめー！誰の許可を得て、香澄ちゃんに触つてやがる！

だが、実は悪びれる様子もなく、逆にオレを睨みつけてきた。

「全く、覗き見とはいい趣味をしている。」

別にそんなじゃねえよ！と言おうとしてやめた。なぜなら、こ
のメガネヤローがニヤリと笑うのが見えたからだ。

もう、それだけで大体のことが想像できた。

最初から全部、こいつが仕組んでいやがったんだ。

くそー！このヤロー。オレが慌てる姿が見たかったんだな！

「……ん？なんで、実はオレが慌てる姿を見たかったんだ？そもそも、こいつは何のためにこんなことをしたんだ。」

だが、香澄ちゃんの言葉に遮られ、これ以上は考えることができなかった。

「違うよ。私、ジョンの主人なのに……。いつも小杉さんに怪我させて。小杉さんに噛みつこうとするジョンをいつも止めれなくて……」

ついに香澄ちゃんの瞳からポロポロと透明な雫がこぼれ落ちるのが見えた。

それを見て、なんだかもったいないような気がするのなんでだ？

まあ、いい。

オレは一応包帯は巻いてあるが使用可能な左手で彼女の雫を拭つてやる。

「泣かないで。別に香澄ちゃんは何にも悪くないよ。」

そうだ。悪いのは実と『ジョン』の方だ。

「それにさ、オレの利き手は左なんだ。だから、右手が怪我したくらいじゃ、日常生活に何の問題もないんだよ。」

少しでも笑って欲しくて、おどけた口調で言う。

まあ、利き手の話も半分本当で半分嘘なんだがな。なぜかよく驚かれるが、実は両利きなのだ。ただ、小さいころから適当に利き手を変えて使っていたため、自分の本来の聞き手が何なのか、よく知らないのだ。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「でも……」

まだ、何か言おうとする香澄ちゃんにオレは微笑んで言葉を紡ぐ。少しでも、彼女の心が軽くなるように……

「オレさ、香澄ちゃんが好きなんだ。だから、泣いてる顔もカワイイけど、笑ってる顔の方がもつといいよ。」

意外な真実 その1（後書き）

この話は長いので、ここで切ります。

さて、ようやくまともな恋愛話になってきたでしょうか？
彼らの運命はいかに！？

それは次のお楽しみで（笑）

意外な真実 その2（前書き）

前回の続きです。

意外な真実 その2

「オレさ、香澄ちゃんが好きなんだ。だから、泣いてる顔もカワイイけど、笑ってる顔の方がもっといいよ。」

ん？なんだか、周りが静まり返ってる気がするんだが・・・オレ、なんか変なこと言った？

香澄ちゃんは顔を真っ赤にしてるし、実もなんか呆れた顔でオレを見てるんだが・・・

「お前、自分が何を言ってるのかわかってるのか？」

そりゃ、わかってますよ。てか、なんかオレ、悪いこと言った？正直な言葉だったのに。

「そうか。よくわかった。お前は天然アホ、バカ、タラシのヘタレだ。」

おい、なんか酷い言われようなんです。誰がヘタレでタラシだ！しかも天然付き。まー、アホとバカが否定できないのが悲しすぎる・・・

「自覚がないのか。可愛そうな奴め。」

なんだ、その憐れみのこもった目は。言いたいことがあるならはつきり言いやがれ！

睨みつけるオレを無視して実は香澄ちゃんの方を向くと、彼女の頭を優しく撫でた。

「まったく、香澄も大変な男に惚れたな。」

オイ、コラ！オレですら呼び捨てなんてしてないんだぞ！！

お前が彼女の名前を呼ぶな！

・・・・ん？今、なんて言った？誰が誰に惚れたって？

「そんじゃ、おお邪魔虫は退散することにしよう。またな。」

実は片手を挙げ、それだけ言うと、スタスタと歩き去ってしまった。

「え？実君！」

香澄ちゃん慌てた様子で実の名前を呼ぶが、あいつは振り向くことなく、雑踏の中に消えていった。

「くそ！言うだけ言いやがって・・・」

まあ、実際問題、あいつは邪魔だったので、これはこれでいいのだが。

だが、一体、何がしたいんだよ。わけわかんねー

大体、あいつは入学当初から腹黒で口が悪くて、でも何でか女にもてて・・・

「あの・・・実君は、口は確かに悪いですが、いい人ですよ。」

どうやら実に悪態をついていたのが香澄ちゃんに聞こえたらしいって、なんで、あいつを庇うんだ！しかも、あいつの話をするときの香澄ちゃん、少し嬉しそうなんですけど！！

「ふ、ふーん。よく、あいつのことを知ってるね。」

なんか、胸の奥がむかむかするぞ。何故だ？は！？まさか、新手の新型インフルか！

ヤバ！香澄ちゃんにうつしたらやばいぞ。

マスクを買いに行った方がいいのか考えていた時、何と、香澄ちゃんがとんでもない爆弾を落とした。

「だって、実君は私の従兄ですから。」

意外な真実 その2（後書き）

長い・・・この話は長すぎる。ということで、今日はここで切ります。

さて、本日の意外な事実はいかがだったでしょうか。捺矢^{としや}は未だに自分の気持ちを自覚していません。さて、彼が自覚する日は来るのか！？

意外な真実 その3（前書き）

すみません。その1でジョセフィーヌが口輪をつけて一緒に歩いているという話がありましたが、今後の展開を考えた上で『彼女』が一緒にいたことを消しました。

意外な真実 その3

「だって、実君は私の従兄ですから。」

・・・へ？今、なんておっしゃりました？

オレの耳にはまるで可愛く可憐な香澄ちゃんと陰険腹黒メガネが親戚関係にあるように聞こえたんですが。

「私の母と実君の母が姉妹なんです。家も近いので、昔から仲良くしてくれてるんです。」

マジで！あの実と香澄ちゃんが従兄妹だと・・・つまり何分の一かは血が繋がっているわけで・・・

「ウソーー！！」

全然似てない！

確かに血が繋がっているとはいえ、兄妹じゃないんだからそんなに似てなくても不思議ではない。

でも、でも、でも。こんな天使みたいな子があんな悪魔の親戚なんて・・・信じられねえ。

ん？従兄妹ってことは、結婚できるのか？・・・なにー

ー！そんなこと許さんぞ！例え、お天道様が許してもオレが許さん。

あー、でも、よく考えたらオレって将来あいつのことお兄さんと呼ぶ日が来るのか？いや、だから従兄妹だって！兄妹じゃないんだから呼ばなくてもいいだろう。ということは、もしかしてあいつとの縁は永遠に切れないのか！？

いやいやいや、ちよつと待て。何考えてるんだよ、オレ。別にオレが結婚するわけじゃないんだから・・・って、結婚！？誰と誰がだよ！オレはあっちの人間じゃないぞ！！オレは女の子が大好きだ！って、あっちってどっちだよ！女の子嫌いな男いたらやばいだろう変体じゃん！あ、間違った。『変態』だった。・・・そんなコトは

どうでもいい。いや、どうでもよくないけど、とりあえずこれはそ
ちに置いて。兎に角、結婚するなら香澄ちゃんの・・・

「私の、なんですか？」

「ぎよわーほーい！」

って、何語だよ。

・・・もしかして、今の全部声に出してた？声に出して
たって事はつまり香澄ちゃんに聞かれてたわけで・・・

「え、えーと、その・・・」

ヤバイ・・・非常にヤバイ。何やってんだよ、オレ。本当、バ
カだよ。いや、バカだけどさ・・・

バカはバカなりにもう少し時と場所と考えてる内容を考えるだろ、
普通。もしかして、オレのこのバカさかげんは一生治らないのか？
それってまずいんじゃない・・・

「ぷ・・・ふふふふ。」

突然、香澄ちゃんが笑いだした。関係ないけど、やっぱ、可愛い
子は笑う時も上品に笑うんだなあー

「本当に小杉さんはいい人ですね。」

楽しそうに微笑む香澄ちゃん。

えーと、何がどうなってそんな話になるんでしょうか？

今までの人生、面白い人とかバカとかアホとかヘタレとかそいう
ことは言われてきたけど、『いい人』は初めてだ。

「心が広い・・・」

いや、全然広くないぞ。むしろかなり狭いと自負しております。

「それに、今だって私のこと慰めてくれようと必死に色んな事をし
てくれますし。」

いや、別に慰めようと思ってやってるわけじゃないよ。これ、オ
レの素です。

うーん、なんだか、気まづくなってきたぞ。ということで、オレ
は話を変えることにした。

「そ、そういや、ジヨンはどうしたんだ？」

「……しまったー！何オレ、今日の悪の根源の一人（いや、この場合一匹か）の名前を出してるんだよ！！バカか？バカなのか？いや、バカなのはわかってたけどさ。それにしてもバカすぎるだろ！！」

「ジヨンなら小杉さんが診察してもらっている間、家に連れ帰って鎖に繋いできました。」

「なんか、少し怒ってる気がするのはオレだけか？」

「……」

「……」

お互い無言。これはいかん！オレはとにかくこの空気を打破するため、口を開く。

「あの」「」

「うわぁー！かぶった。」

「ごめん。まず、香澄ちゃんからどうぞ。」

「まずも何も最初から話す内容考えてなかったし。では……と香澄ちゃんが恐る恐る口を開いた。」

「あの、今日のお詫びを兼ねて私の家に来ませんか？」

意外な真実 その3（後書き）

今日の意外な事実は・・・ジョンが鎖で繋がれたことかな？
この話はまだまだ続きます。

意外な真実 その4

「あの、今日のお詫びを兼ねて私の家に来ませんか？」

「え？」

突然のお誘いに驚く。一方、香澄ちゃんの方はというとなぜか顔を真っ赤にし、どこかそわそわしている。

「お、美味しいお茶菓子があるんです。」

「へ、へえー」

なんか、無茶苦茶力がこもってるなあー。まあ、でも、だいぶ腹が減ったし、のども渴いてるし、ちょうどいいや。あ、でも、もうすぐ夕飯の時間。・・・ま、大丈夫だろ。

「じゃ、お言葉に甘えさせてもらおうかな。」

そう、返事をした時の香澄ちゃんの顔をオレは一生忘れないだろう。

まさに、太陽のような笑顔。あまりの可愛さに一瞬、見とれてしまった。

「?どうしましたか？」

可愛く首を傾げて尋ねられ、慌てて首を振る。

「な、なんでもない！さ、暗くなってきたし、早く行こう。」

「今日、両親は帰りが遅くなる予定なのでゆっくりしていつてくだ
さい。」

加藤家の家の前。ドアのカギを開けた香澄ちゃんが柔らかな口調

でとんでもない爆弾発言をした。

「えっ？そ、それはちよつと・・・」

色々まずいのではないか？

いや、何がまずいのかはわからんのだが・・・

「さ、どうぞ。」

そう、香澄ちゃんがドアを開けてくれる。

ここまで来て逃げるわけにもいかない。ということで、全ての勇気を振り絞り家の中に入ろうとした。その時、聞きなれた犬の鳴き声が聞こえ、首を声のした方に向ける。

・・・うわぁー、ジョンさんがものすごく殺気立ってオレを睨みつけてるよ。

あいつ、そのうち殺気で人、殺せるようになるんじゃないのか・・・？

なんか、怖いな。・・・まあ、いいや。よくないけど、いいや。

それに、今のあいつは、犬小屋で首に鎖を掛けられ動けないみたいだし・・・殺されはしないだろ。多分・・・

「小杉君？」

なかなか、中に入ろうとしないオレに香澄ちゃんが呼びかけてくれた。

そこで、ようやく現実に戻った。

「や、やっぱ、オレ、帰るよ。」

え？と香澄ちゃんが驚いた顔をした。でも、その方が、お互いいいと思うんだよね。

やっぱ、お年頃の男女が一つ屋根の下にいるってまずいと思うし、ジョンがい殺さんばかりに睨みつけてくるし。

と、香澄ちゃんの顔が驚きから涙顔になって、ようやく、失言をしたことに気がついた。

「や、違っただ！一緒にいたくないとか、お茶を飲むのが嫌とかじゃなくて・・・えーと、その・・・」

うまい言葉が見つからない。なんて言ったら香澄ちゃんは笑って

くれるんだ？

「そう！今日、香澄ちゃんは実のヤローとデートだったじゃんか。」
すると香澄ちゃんの顔が一変し、不思議そうな顔で「デート？」
と首をかしげる。

その仕草が、何とも言えないくらい可愛い・・・いや、今はそんなこと関係ない。

「そ、そう、デート。」

なんだか、また、胸の奥がムカムカしてきたが、今はそれどころじゃない。

「それを、オレが邪魔しちやったじゃないか。だから・・・その・・・」

って、結局何が言いたんだよ、オレ！

くそ、なんなんだ。この言葉にできない想いは。

「あの・・・私、実君とデートなんてしてませんよ。それに、今後
もする予定なんてありませんし。」

「へ！？」

可愛らしい天使は、困惑した顔で再び爆弾を落としてくれました。
いや、それよりも、デートじゃない、だと？でも、「実の奴はデ
ートだって・・・」

「それに、私、好きな人がいるんです。」

意外な真実 その4（後書き）

なんか、もう、意外じゃない気がしてきました・・・
多分、香澄ちゃんの気持ちに気がついてないのは擦矢^{とじや}だけでしょう
ね。
すみません。まだ、この話は続きます。

意外な真実 その5

「私、好きな人がいるんです。」

「はひ!？」

突然の告白に、オレは目を丸くした。

ちよつと待て!誰だよ、そいつ。今すぐオレの前に出てこい。そしてたら100発殴るだけで勘弁してやる。

「でも、その人、全然私のこと、見てくれなくて・・・」

「それは酷い男だね。」

香澄ちゃんという素晴らしい女の子がいるのに見ないなんて・・・それって、男としてどうよ。

「それに私、いつもその人の前で失敗しちゃうんです。」

どうやら、ジョンがその思い人とやらに噛みつくのを止められならしい。

香澄ちゃんが悲しそうな顔で話してくれた。

だが、香澄ちゃんには悪いが、ジョンには『ナイス!』とほめてやりたい。

「このままじゃ、好きになってもらうどころか嫌われるんじゃないかと思つて・・・」

それが怖くて実に相談したという。

「どうも、実君はその人と友達だそうでうまく仲を取り持つてくれるって・・・」

へえーそうなのか。実の友達ねえ。あいつ、オレ以外に『友達』

なんて呼べる奴がいたのか?

どうも、あいつは人を信用しないからな。表面上は『友達』として付き合つても実際は違つて場合が大量にあるはずだ。

そんな奴の『友達』ねえ。

ん？なんか引つかかる・・・一体何だ？

だが、思考はすぐに香澄ちゃん言葉で断ち切られた。

「でも、やっぱり無理でした。しかも、今日はこんな大ケガを負わせちゃって・・・私のことなんてもう、嫌いですよね？」

床が濡れている。もしかして、泣いているのか？

というか、もしかして、香澄ちゃんが好きな男って・・・

「ごめんなさい、小杉さん。ごめんな・・・さい・・・ごめんなさい・・・」

でも、と顔をあげた彼女の顔は涙にぬれていてぐちゃぐちゃだ。

それでも、オレは彼女が可愛いと思ってしまった。

恋をする一人のきれいな女の子だと。

「私は、あなたが好きなんです。」

意外な真実 その5（後書き）

あとちょっとで終わる予定なのに、なかなか進まない・・・
でも、今のところ順調に行けばあと2話で終わる予定なので、もう
少しお付き合いください。

ハッピーエンド？ その1（前書き）

なぜか、この回だけ激甘です。あくまで今までと比べてですが。
R指定には入らない・・・ハズです。

ハッピーエンド？ その1

「好きです・・・」

その言葉にオレの心臓が大きな音をたてて跳ねた。

香澄ちゃんは今再びうつむき、ただ、「ごめんなさい」という言葉だけを呟く。

ここまで頭が真っ白になったのは生まれて初めてかもしれない。思考が停止しうまく状況が理解できない。

そんな状態でもたった一つ理解できる気持ちがある。

これ以上彼女に泣いて欲しくない。

気がついたら彼女を抱きしめていた。

思考がうまく動かない。それでも、言わなくてはいけないことがあるような気がする。

オレの口は自然と動く。

「オレも香澄ちゃんが好きだよ。」

香澄ちゃんの体がビクンと跳ねたのを腕の中で感じた。

・・・ん？今、オレ、なんて言った？ちょ、ちょっと待て！オレが好きなのはジョセフィーヌであって・・・でも、ジョセフィーヌは実はオスで、香澄ちゃんは女の子で・・・しかも、オレにはもったいないくらいいい子で、みのる実の従兄妹で・・・ああ、もう！この際なんでもいいよ！！

って、そうじゃなくて！

「本当・・・ですか？」

混乱するオレに香澄ちゃんが目を輝かせて尋ねる。
ヤバイ。可愛過ぎて鼻血出そう・・・なんか、今、変態と呼ばれる奴らの気持ちがわかる気がするぞ。

（どうしよう。可愛過ぎて食べちゃいそう・・・ああ、やべーオレも変態の仲間入りしてしまった。）

とか思ったら最後、オレの口は勝手に動いてた。

「ああ。本当だよ。」

太陽のように輝く笑顔というものを初めて見た。
心臓がドキドキする。ヤバイ。抑えが効かない。

オレはゆっくり香澄ちゃんの顔に近づく。その意図がわかったのか、香澄ちゃんは目を閉じてくれた。

あと数センチ。あ、もうくつつく・・・

がぶり！！！！

がぶり？しかも、今までで一番迫力のある大きな音が聞こえてきたんだが・・・しかも、なぜか、右足が痛い。

嫌な予感がして、振り返ると、いつか見た光景の再現のようにジョンの口の中にオレの右足があるではないか。

いいところだったのになあ。

オレは様々な痛みがこもった涙を流しながら、最近お決まりの悲鳴をあげた。

「○× □ 〒 ♀ ♀ # ? §」

ジョン、いつか絶対にクロス！！

ハッピーエンド？ その1（後書き）

次回で最終回です。

誤字脱字報告、感想、ツッコミ等ありましたら拍手の方をお願いします。

ハッピーエンド？ その2

んで、次の日。

右手右足を包帯でぐるぐる巻きにし、登校した。病院に寄ってから来たため、すでに昼休みになっていた。そして、そんなオレを見た実は予想通り……

「……………ぷ。」

ああ、ああ、予想通りだったさ！実のヤロー、見事に大笑い（これが、こいつにとって『大笑い』に分類されるのだ）しゃがった。「それで、せつかく人がおぜん立てしてやったのに、ジョンに噛まれたんだって？」

冷静に話してるつもりだろうが、目と口元が笑ってるぞ！しかも、肩も震えてるし。

ああ、クソ！昨日のことは何度思い出しても腹が立つ！

ジョンに噛まれたオレは、再び半泣き状態になった香澄ちゃんをなんとか慰め、とりあえず、御茶菓子もそこそこに家に帰った。ここまではまだいい。いや、全然よくないがひとまず置いておく。

問題はここからだ。息子が腕に包帯を巻き、右足を引きずりながら帰ってきたというのにオレの家族は、そんなオレを大笑いしやがった。

ああ、もうこれ以上なく腹抱えて笑いやがったよ。バカにされたさ。ああ、なんか、泣きたくなってきた……………でも、さすがに心配する気持ちもきつとあったんだろう。朝一で、しかも車で、病院まで連れて行ってくれた。（運転してたお袋の肩が震えていた気がしたが気のせいかな？）

まあ、とりあえず傷は深いが、生活に支障はないと言われ、登校してきたのであった。

「そう言えばお前！オレをだましたな！！」

だが、実は一瞬目を丸くしたがすぐに何とことかわかったらしく、ニヤリと笑う。

「だましたわけじゃない。お前が来なかったら一緒に茶でも飲むつもりだった。」

ぬゑにー！！そんなコト許せるか――！！

「まあ、お前が香澄に惚れているのはわかってたしな。ああ言えば絶対に後を追ってくると思っていた。」

はい？ちょ、ちょ、ちよっと！今、なんておっしゃりました？

オレが香澄ちゃんに惚れてたことを知ってただって？

「い、いつからだよ！」

「ん？お前がジョンを女の子に買われたとバカみたいに叫んでいた辺りからかな。まあ、さすがにあの頃はまさか相手が香澄だとは思ってなかったが・・・」

この間、彼女が学校に来た時に知って、驚いた・・・と付け加えられた。

というか、むしろオレの方が驚いてるんですけど！！

「どうやら、学生服と校章から俺と同じ学校に通っていることを知ったらしいぞ。なんとか、お前に謝ろうとあそこですつと待っていたらしい。」

う・・・う・・・ごめんよ、香澄ちゃん。むしろ、謝るべきはオレの方だろ！！

なんて、いい子なんだ！

「捺矢、言つとくが、香澄は俺の妹同然なんだからな。もし、あいつを泣かせたら・・・」

えーと、実さん。なんか、無茶苦茶黒いオーラが出てますよ。しかも、目が笑ってないです。

というか、もうすでに何回も泣かせてるんですけど・・・

「覚悟しておけ。明日の朝日が見れると思うなよ。」

怖い、怖すぎるよ！で、でも、一応は応援してくれてるのか？

って、これからどうなるのよ、オレ！未来はあるのか？

次に続く。．．．つづく．．．よな？．．．．．続いてくださ
い！！

本編完結

ハッピーエンド？ その2（後書き）

一応、これにて本編は終了です。ここまで読んでくださってありがとうございました。

壁は高いぜ・・・その1

香澄ちゃんと付き合うことになって早一ヶ月がたつ。季節は真夏。定期テストも終わり、学校も夏休みに入った。

一ヶ月・・・本当に色々なことがあった。ああ、あったとも！う・・・う・・・思い出すだけで悲しくなる・・・

まあ、とにかく様々な・・・様々な障害がオレ達の・・・いや、オレの前に立ちほだかりやがった。

『おかげで』なのか『そのせいで』なのか。最初のころは「小杉君」だったオレの呼び名が「捺矢君」と名前で呼んでくれるようになった。まあ、『君』がついているが、これで実と並んだらう。

え？誰のことだつて？そんなの決まっているじゃないか！オレの彼女だ。

・・・・・・うわぁー！『彼女』って言っちゃったよ。はずいぜ。

と、とにかく、あの時の感動は今でも忘れない。初めてオレを下の名前で呼んでくれた時、天にも昇る気持だったんだ。くそー！日本語ごときではうまく表現できないぞ。

まあ、日本人むけにわかりやすく例えるならば“Big ban g”（片仮名にするとビッグバン）が起こるエネルギーなみに大きかったんだ！

え？わかりにくいだと。知らん！オレさえわかっていればいいのだ。

うーでも、まだ、実のヤローとは位置的に同じなんだよなー
実のことも下の名前を君付けで呼んでるし。そのうち呼び捨てにならないかなあ。

へ？別にそんなコトどうでもいいじゃん、だつて？ふざけんな！
これはゆゆしき事態ですぞ。

はやく奴とは差をつけたい。じゃないと、香澄ちゃんが奴に盗ら

れてしまつかもしれない。

え？香澄ちゃんって誰だって？むしろ、お前は誰だって？

ふふふ、教えてやろう。オレは香澄ちゃんの・・・か、か、か・・・

『カレイか？』

・・・・ちがーう、彼氏だ！ああ、くそオレの頭の中まで入ってくるなよ、実！

ゴホン。さて、気を取り直そう。

えーと、そうそう、つまりオレは香澄ちゃんの彼氏で実のヤローはただの従兄妹。しかも産まれた日にちが近かったらしくほとんど産まれたときから一緒にいるのだ。

つまり、奴とオレではスタートからして天地ほどの差があるというわけだ。

・・・・でも、呼び捨てにして欲しいなあ。頼んだらダメかな？
香澄ちゃんがオレを呼び捨てにして呼ぶ・・・グホオ！やべー、鼻血出る。

で、でもさ、やっぱ彼氏としては他のヤローとは違う扱いをされたいわけだ・・・

・・・・オレのこの望みは不相应なものなんだろうか？

壁は高いぜ・・・その1（後書き）

備考：捺矢が香澄と出会ったのは6月。現在は7月下旬です。

壁は高いぜ・・・その2（前書き）

擦矢の思考が、なぜだか甘いです。相変わらず彼は変態です。壊れてます。

壁は高いぜ・・・その2

まあ、そんなようなことをぼーと考えながら、オレはデートの待ち合わせ場所、池ノ上公園の時計塔前に立っていた。

そう、デートですわよ、奥様！デート、デート、デート！

え？誰とだつて？そんなの決まってるじゃありませんか。オレの彼女、加藤香澄ちゃんですよ。

そんでもって、このオレがデートなんですよ！

ここしばらくはテストやらなんやらのせいで、まともにお互い会えない日々が続いていた。だが、そんな日々も今日でおさらばだ！
実に散々バカにされようが、妹の咲に服のセンスが^{みる}ありえないと言われようが今日はデートだ！

今まで会えなかった分、お互いの愛を深めあうのだ！

・・・・・・なんか今、むちゃくちゃ恥ずかしいことを言っただ気がするぞ。

やべー、心臓がバクバクいつてるよ。

どうも、オレは珍しく緊張しているらしい。入学式の日、新入生代表で生徒たちの前に立った時ですら、こんなに緊張しなかったのに・・・思い出したくないことまで思いだしてきたから、もう考えるのはやめよう。

オレはズボンのポケットからハンカチを出すと、手を拭く。時計を見るとちょうど約束の時間まであと1時間だ。

あと1時間・・・考えただけで心臓が飛び出すくらい音を立て始めたぞ。

さて、どうしたものか。そうだ！香澄ちゃんと出会った日々を思い出そう。

思い出す・・・思い・・・出す、思・・・い・・・出・・・
って！バカな姿しかさらしてないじゃん！（ちなみにここで『お前

は事実バカなのだから仕方がない』などとぼく陰険冷血メガネの
声が聞こえてきたが、無視する。)

・・・う・・・う・・・でも、確かに頭の中はあっちの住人だし、
しょっちゅうジョンに噛まれたし(あ、これは今もか)言動も時々
おかしいし、挙動不審な時があるし・・・なんか、挙げたらきり
が無くなってきたんですけど。・・・泣いてもいいですか？

いやいやいや、泣いている場合じゃない！！あれ？でも、そう言
えば、何で香澄ちゃんはオレなんかがよかったんだろう？

自分で言うのもなんだが、見た目はそら辺のモデルより良いと
思っている。(ちなみにこの件に関してだけは母や妹も認めている)
それに頭も悪くない。少なくとも学年で、上位に入っている・・・
ハズだ。

実際、そこだけを見てオレに告白してくれた子はたくさんいる。

でも、悲しいかな、オレの中身(内面)を知るとなぜか、皆引い
てしまうのだ。

一応、一時期、何とかしようと、成績優秀&まじめな普通の学生
さんのように見せてた時もあった。だが、それも実との出会いで
見事、先生からも生徒からも「バカ・アホ・ヘタレ」の称号をGE
Tしてしまった。

おかげで、時々、実だけでなくクラスメート、酷い時には同級生
もつとひどい時には学校中の人たちからいじられる生活を余儀なく
されている。

まあ、そんなことはどうでもいい。が、しかし、香澄ちゃんは一
体こんなオレのどこがよかったんだろう？

聞きたい・・・でも、聞くのは怖い。

その逆、彼女もよいところならいくつでも言える。

優しいし、可愛いし、声を聞いていると心地良いし、一緒にいる
と安らぐし・・・

ああ、挙げればきりが無い！

前に実にも言われたけど、彼女は俺みたいな男には本当にもった

いないと思う。思うけれど、ここで他の男が現れたら身を引くかと尋ねられれば、誰が引くか、くそつたれ！と叫ぶだろう。

あの、甘く透き通った心地よい香りと味をオレ以外の男が味わうなんて……考えただけでも、そいつを殺したくなる。

「捺矢君。」

最近、電話でしか聞け無かった、決して高すぎず、柔らかな響きを持つ声音。

時計を見ると、時刻は約束の30分前。

どうやら、待ち人も早く来てくれたようだ。

オレ笑顔で『彼女』の方を向いた。

がぶり

ふう、最近この展開は慣れてきたぜ！少なくとも悲鳴をあげない程度には。

足元を見ると、予想通りというかお決まりのようというか、美しい毛並みの美女、ジョセフィーヌがオレの右足に噛みついていて。そうか、お前はそんなに右足が好きか……この間も、右足を噛みやがったよな。

あれ、治るのに結構時間がかかったんだぞ？

それにしても、慣れてくると痛みを感じなくなるって本当なんだなあ。

あ、香澄ちゃんが、顔を真っ青にしてこっちに走ってくる。

なんだかなあ。今日は二人っきりでデートのはずだったのに……

頼むよ、神様！！たまにはまともに二人っきりでデートさせてくれ！

壁は高いぜ・・・その2（後書き）

波乱万丈？のデートが始まりました。さて、二人はデートを楽しむことができるのでしょうか。

壁は高いぜ・・・その3

「ジョン、お願いだから今すぐ離れなさい。」

噛まれてから約5分。麗しのジョセフィーヌは未だにオレの右足にしがみ（がぶり）ついていた。香澄ちゃんは何とかオレからジョンを離そうと四苦八苦している。

もう、オレとしては諦めの境地なんだが・・・

時は無情に過ぎていく。先人は言った。『時は金なり』と。

この、貴重な香澄ちゃんとのデートの時間をこんなことで消費したくない。

もういつそ、このままジョンを引きずりながらデートをするのかと覚悟を決め、そのことを香澄ちゃんに話そうとした。その時、香澄ちゃんがジョンを睨んだ。（睨んだ顔も可愛いーと思うオレはやはり重症だろうか？）

「もういいわ。ジョンなんて知らない。一人で勝手にしなさい！」

厳しい口調で言われ、ジョンは渋々オレから離れた。離れる途中、名残惜しそうな表情をしていた気がするんだが・・・気のせいかな？

「捺矢君、大丈夫ですか？」

香澄ちゃんが泣きそうな顔でオレの顔を覗き込む。

やべー、可愛過ぎる。食っちまいたい・・・って、それはまずいだろ！

「怒って、いるんですか？」

脳内で自分にツツコミを入れていたため、黙っていたのだが、それを彼女は『怒っている』と勘違いしたらしい。

不安げな顔をする彼女の顔を見て、オレは慌てて首を振る。

「全然！ちよつと自分の脳ミソが末期症状になってるなあーって思ってただけだから。だから気にしないで。」

しかし、彼女の中ではまだ納得がいかないらしく、肩を落とした

はまだ。

なんとか、彼女に笑って欲しい。それに、こんな貴重な時間をこんなことで消費したくない。

「ほんと、気にしないでいいよ。ほら、オレは慣れてるから。こんなことで怒ったり、ましてや気にしたりしないよ。それにさ、何とも言ってるけど香澄ちゃんが悪いわけじゃないんだ。だからそんなに気にしなくてもいいよ。さ、時間もだいぶ食っちゃったし、デートに行こう。」

しかし、香澄ちゃんは顔をさげたまま、何の反応もしない。

（全く、彼女は・・・）

オレは心の中で苦笑すると、なるべく乱暴にならないよう気をつけて彼女を抱きしめ、その長い黒髪を優しく梳いた。

抱きしめた彼女の体がビクンと跳ねる。だが、彼女はそのまま腕をオレの体に回しただけで、何も言わない。顔はオレの胸に押し付けているためどんな表情をしているのか分からない。だが、さすがに付き合ってから一ヶ月もたっている。彼女が何を考えているくらいわかる。

というか、いつもそうなのだ。オレがジョンに噛まれると泣きそうな顔をして、オレを見る。

そんな顔はして欲しくないけれど、そんな彼女が可愛いと思う。泣き顔も笑顔も何もかもが愛おしい。願わくは、その顔するのはオレだけ限定にして欲しい。まあ、無理かもしれないけどさ。

このまま過ごしてもいいが、やっぱりせつかくのデートだ。二人でどこかに行きたい。

「さ、もう行こう。」

ピクリと腕の中で彼女の体が跳ねた。やがて、恐る恐るといった様子で顔を上げ、オレを見つめる。

「でも・・・」

まだ、何か言い募ろうとする香澄ちゃんの唇にそっと人差し指を置く。

穏やかでほんの少し甘い空気。いつまでも、こうしていられたら、きつと幸せだろう。

だが、幸せすぎて忘れていた。すぐそばに邪魔モノがいたことを・
・・

「わん！わん！わーん！」

空気の読めない鳴き声がオレ達の甘い空気をかき乱した。

ああ、くそ！頼むからさ、空気読んでくれよ！！

というか、約束の時刻を30分も過ぎてるけど、オレ達全然進めてねえ！

おかしい。朝の占いでは1位だったはずなのに・・・それなのにこんなことが起こるなんて・・・クソ！今日は厄日だー！ー！

――

壁は高いぜ・・・その3（後書き）

糖分が、回を追うごとに上がっている気がします。

壁は高いぜ・・・その4

とにかく、うるさく吠え続けるジョンを何とかするため、香澄ちゃんはリードを取り出すと奴の首輪に取り付け、その紐を近くの木
の枝（太そうなやつ）に結び付けている。

ちなみに、道中リードをつけていなかったのかというところでは
なかったらしい。どうやらジョンのヤローがオレを見つけた瞬間、
暴れに暴れまくってその結果、紐が切れたのだという。

どんだけすげー力を持ってるんだ？まだ、子犬だろ。

そうか、そうか。そんなにもオレ達のデートを邪魔したいのか。
ちらりとジョンが繋がれている方を見ると・・・うわーい、なん
かものすごい形相で睨んでるよ。

というか、睨みたいのはこっちだっつーの。

ようやく結び終わったらしく、香澄ちゃんがこっちに帰ってくる。
むー、まだ俯いてるよ。まったく、気にしなくてもいいのに。

内心で苦笑しながら彼女の顔を覗き込んで見ると・・・真っ
赤だ。

えーと、これは、その・・・やばくないですか？こう、ムラム
ラしてくるんですけど。

やべー、我慢の限界がきそう。なんとか話題転換をしなくては！
そこで、頭に浮かんだ言葉を口に出す。

「そ、そう言えば、なんでジョセ・・・じゃなくてジョンも一緒なの
？」

自分で言っというてなんだが、本当に何で一緒に来たんだろう？は
！まさか、オレと二人っきりのデートは嫌だったとか？

あ、ありえる・・・というか、それしか考えられない。うおー、
ごめんよ、香澄ちゃん。どうか、嫌いにならないでくれー！

今度はオレの方が半泣き状態だよ。

「あ、いえ、最初はちゃんと私一人で来るはずだったんです。」
あれ？そうなの。

目を丸くして首を傾げるオレに香澄ちゃんは頷いた。

「でも、ジョンが無理やりついて来て・・・」

それで結局一緒に来ることになったということか。クソ！なんて奴だ。ご主人様たちのデートの邪魔をしようなんて。往生際が悪いぞ！

腹が立って来て、オレはジョンを射殺さんばかりに睨みつける。
ジョンの方も負けじと睨み返してくる。って、犬がライバルってどうよ。

「でも、なんだか嫉妬しちゃいます。」

「へ？」

今、何とおっしゃいました？

「ジョンはきつと捺矢君が好きなんです。」
はい！？

壁は高いぜ・・・その4（後書き）

回を追うことに捺矢の脳内変態度が上がっている気が・・・いや、
もともとか。

はじめて知る自分 その1

「ジョンはきつと捺矢君が好きなんです。」

衝撃的すぎる発言にしばし呆然としたが、すぐに我に返って否定する。

「いやいや、ありえないから。絶対にならないから。むしろ、その逆だつて。つて、オレがジョンに惚れてどうするのさ！まあ、ジョセフィーヌのことは好きだけど・・・あれ？ジョンはジョセフィーヌでジョセフィーヌはジョンで、つまり2匹は同一人物なわけで・・・うお！オレはジョンのことも好きなのか？いやいやいやいや、ありえねえ。オレは男よりも女の子の方が好きだ！！」

つて、何語つてんだよ、オレ！！ヤバイ、これはマズイ。ひ、ひかれたよなあ・・・

恐る恐る香澄ちゃんの方を見ると、彼女は特に気にした様子もなかった。だが、憂いを帯びた顔はそのままだ。

「でも、ジョンはいつも捺矢君に会うと嬉しそうに駆け寄って行くし・・・」

え？オレの意味不明な言動はスルーですか？いや、まあ、そっちの方がいいんだけどさ。

あれ？今、香澄さんは何とおっしゃいました？ジョンが嬉しそうにオレのもとまで駆けてくるって？

いやいや、それは違うから。全然嬉しそうじゃないから。むしろ殺してやると言わんばかりの勢いでオレに向かってくるんですけど！！

オレは必死に首を振って否定するが、香澄ちゃんは全く気付いて

いならしく言葉を続ける。

「噛みつくのだって一種の愛情表現だと思いますし……」
そんな痛い愛情はいらねえ!!

「で、でも、香澄ちゃん。一応あいつはオスでオレ男なんだけど……」

一瞬、頭の中に実が現れて「お前が言うな」と冷たく返されたが、それは無視する。

「でも、捺矢君は前、愛に種族や性別は関係ないって……」

……うん。言ったね。確かに言いましたよ。ああ、もう！
あの頃のオレを殴りたい!!

ん？いや、この言葉は確か実^{みの}にだけ言った気がするんだが……
「実君が言っていました。」

おい、こら、実……!!表に出やがれ！なんでよりによって香澄ちゃんにそんな話をするんだよ。オレになんか恨みでもあるのか!!

「実君は悪くないんです!」

オレの心と呼んだのか(まあ、わかりやすいらしいけど)香澄ちゃんが慌てた様子で奴を庇う。

むー、なんか、腹が立つてくるぞ。なんで、あんな奴なんか庇うんだ。

「私が、実君にお願いしで教えてもらったんです。捺矢君のことも
つと知りたくて……」

「え？」

まるで沸騰したお湯が一瞬で標準温度に下がったようにオレの怒りは収まっていた。

代わりに、なんだかオレの胸の奥がむずむずしてきた。

「今度からはさ、そう言うことはオレに聞いてくれよ。オレのことはオレが一番よく知ってる……ハズ？だしさ。それに、ほら、オレって一応香澄ちゃんの彼氏だし。」

『一応』ってなんだよ、オレ。自分で言っというてなんだけど、な

んだか悲しくなってきたぞ。

でも、『一応』だろうがなんだろうが、香澄ちゃんの今の彼氏はオレなわけで、例えそれが従兄だろうがなんだろうが他の男が彼女に近づくのは面白くないし……

ああ！男心って複雑だ……

でもでも、いくらオレにはもつたないくらい華麗で美しい子でも今はオレのなんだぞ！だったら、他の男なんかに触れて欲しくないし、言葉も掛けて欲しくないと思うのは普通だろ！多分……ついでに息もするなと言いたいなあ。

……オレってもしかして独占欲が強い？うお！初めて知った。ということは、オレって以外に自分のことを知らなかったりするのか？

「あ、あの……捺矢君？」

天使のように澄み渡った美しい音色にようやく現実に戻ってきた。

「ほへ？何？香澄ちゃん。」

しかし、香澄ちゃんは何も言わない。おかしなことに彼女の顔は触れたらやけどをするんじゃないだろうか思うほど真っ赤に染まっていた。

そこで、ふと、嫌な予感がした。

「い、今の言葉……」

今のつてどの言葉だ？というよりむしろ全部か？全部なのか？オレは今の言葉を全部声に出していたということか？

は、は、恥ずかしー

やべー、オレの顔まで真っ赤になってきたぞ。

「じよ、『冗談……ですよね？』」

オレが言った言葉の何に対して冗談と言っているのかわからないが、一言も嘘や冗談など言っていないので首を振った。

「全部本当だよ。」

ついに香澄ちゃんは顔を隠してしゃがみこんでしまった。

「捺矢君はズルいです。」

しばらくして香澄ちゃんが口を開いた。

「へ？なんで？」

本当のことを言っただけなのに何でズルいと言われなければいけないのだろうか？

しかし、香澄ちゃんはそれ以上何も言わず、顔を隠している。

ちよつと、これは困るなあ。しょうがない。

オレは彼女の体を抱き上げた。

はじめて知る自分 その1（後書き）

なんだか、中途半端な感じがしないでもないですが、長いのでここで切ります。

はじめて知る自分 その2

「と、捺矢君？」

突然のことに驚き焦った顔で香澄ちゃんがオレを見る。

そんな彼女が可愛くてオレは笑いながらそつと彼女を降ろす。もちろん、自分の腕は彼女の腰に回したままで。

「捺矢君は本当にずるいです。いつもいつも私の顔が赤くなるようなことを言って……」

そのまま、香澄ちゃんは再びオレの胸の中に顔をうずめてきた。うわぁー、やべー昇天しそう……もう一生このままでいいわ。でも、そろそろ我慢の限界が……

「香澄ちゃん……」

自分でも驚くほど熱を含んだ声。香澄ちゃんはゆっくりと顔を上げオレを見つめる。

その顔はまだほんのりと赤く染まっている。

オレが何をしようと思っているのかわかったのだろう。彼女は恥ずかしそうに目を閉じた。

オレもそつと目を閉じ、彼女の甘いぬくもりに触れようとした。

がぶり

がぶり？なんか左足が痛いんですが……

嫌な予感がして、そろそると目をやると……は、は、は！嫌な予感って当たるんだなあ。

ああ、愛してる。愛してるよ、ジョセフィーヌ。え？嘘だろうって？そんなことないさ！オレは嘘なんて付かない。そう、とりあえず

『ふざけんじゃねえーよ、てめえー！！殺すぞ！』てな具合には愛してるさ。

「ジョン！」

様子がおかしいことに気付いたのか、香澄ちゃんは目を開け、オレとジョンを見ると顔を真っ青にして怒鳴った。

本日2回目。出会ったときからもう何度目になるだろうか？

というか、お前、さっきまで木の下にいたはずだろ！！どうやって紐をちぎってきたんだよ。

「ジョン！離れなさい。」

再び香澄ちゃんに怒られ、奴は耳を垂れ下げどこかしよんぼりしながらオレから離れる。

おお！昔に比べてだいぶ素直になったじゃないか。

がぶり

へ？・・・前言撤回。テメエ！いい加減にしろよ。何で今度は右足なんだよ！さっきも噛んだじゃないかよ！

くそ！さすがに今度は我慢できねえぞ。いつも以上に痛い・・・

オレは涙をこらえながら点を仰ぐ。

ふ、さあ皆さん！大きく深呼吸をして一緒に天高く、お空の御先祖様に向かって・・・

「○ □ 〒 ♀ # ! ! !」

壁は壊せば通れる その1（前書き）

微妙に捺矢^{とつや}が変態です。いまさらですが。

壁は壊せば通れる その1

「本当にごめんなさい。」

この言葉を聞くのはもう何度目になるのか。自分の彼女にこんな顔ばかりさせるオレって彼氏失格なんじゃないだろうか？ううう・
・でも、別れたくはないよ

あの後、右足から血は出たがそうたいしたことはなかった。（どうやら以前オレを病院送りにしたことでもかなり酷い罰を受けたための手加減したようだ。）が、とてもデートどころではなく、とりあえず香澄ちゃんの家で手当てをしようという話になった。

本来なら病院に行くべきだ！とおっしゃる方もいるだろう。しかし、残念ながら夏休みといえども本日は日曜日。当然のことながら病院はどこも開いていない。

まあ、別にオレは手当てでもそう必要無いって言ったんだけど、彼女は首を振って無理やりオレを連れて来たのであった。

ちなみに、今オレはどこにいると思う？

え？加藤家だって？そりゃ、香澄ちゃんの家にはいるよ。オレが聞いているのはこの家のどこにいるかってこと。

ん？わからないのか。それならしょうがない。教えてやろう。なんとオレは香澄ちゃんの部屋のベットのの上に座っているのだ！！

ああ。彼女の匂いを肌で感じるぜ！やべーこのベットの上でゴロンゴロンしたいぞ。って、オレは変態か！！いや、変態かもしれないけど・・いやいやいや肯定してどうする。なんか挙動不審だぞ、オレ。落ちつけ、落ちつくんだ。さあ、深呼吸をしよう！吸ってー吐いて。吸ってー吐いて。

おお、だんだん落ちついてきたぞ。さすがオレ！

「捺矢君、お茶とご飯を持ってきましたよ。」

「ぎよほふふあー！ー！！」

突然の香澄ちゃんの登場に落ちついてきた心臓がまた激しく鼓動しだし変な悲鳴をあげてしまった。

「だ、大丈夫ですか？」

香澄ちゃんは慌てて部屋の中央に置いてある小さな机に飲み物と食べ物置くと、オレの傍に近づく。

「あ、う、うん。大丈夫だよ。」

あんまり大丈夫じゃないけど。心臓がバクバクいつてるよ・・・
「そ、そう言えば、今日はご両親、どうしたの？」

休みの日なら普通親が家にいるだろう。我が家も母は今でごろごろテレビを見ているだろうし、父はそんな母の体をマッサージしているだろう。

我が両親は子供の目から見ても鬱陶しいくらいに仲がいいのだ。
父は母絶対主義でいつも尻にひかれているが特に気にしていない。しかも、自分の子供はどうなってもいいが、妻だけは死んでも守ると毎日のように宣言している。父親としてどうかとは思うが、まあ、仲が悪いより良いだろう。それに最優先事項が母なだけで、別に子供を放置しているわけでもない。

まあ、我が家の話はどうでもいい。

「親ですか？今日はいい天気なので二人とも出かけてるんです。」

そう微笑む香澄ちゃんにオレの心も和む。

ん？出かけてる？誰が？香澄ちゃんの親が？？

って、それはまずいでしょ！！

一応、恋人同士の男女が一つ屋根の下っただけでもまずいの二人つきりで、しかも彼女の自室にいるなんて・・・これは襲・・・いやいやめよう。考えてはいけない。

オレは獣じゃない。人間だ。狼なんかにならないぞ。

そんなオレの葛藤を知ってか知らずか香澄ちゃんはオレのけがの手当てをし、「ご飯、頑張って作っただんです。」とホカホカでとりりとしたオムライスを差し出した。

ねえ、ちよつと、これってプロ級の腕じゃないですか？

「ありがとうございます。」

一口食べると、舌がとろけるんじゃないかと思うほど美味しい。

ああ、香澄ちゃんの良いお嫁さんになるだろうなあ。

「美味しいですか？」

不安そうにオレの顔を覗き込む香澄ちゃん・・・ヤバイ、オレの中の狼が目覚めそう・・・

「うん。すつごく美味しいよ。香澄ちゃんの良いお嫁さんになるね。」

何とかにつこりほほ笑むと彼女は頬を赤くして俯いた。

えーと、あとどれくらいオレは我慢しなくてはいけないのでしょうか？

壁は壊せば通れる その1（後書き）

おあずけをくらっている捺矢。さて、次回はどうなることか。

壁は壊せば通れる その2

「捺矢君は本当に優しいですね。私のことを訴えてもいいのにそんなコトせずにもいつも笑って許してくれて・・・」

「ご飯を食べ終わって一息ついていた時、香澄ちゃんが口を開いた。訴えるって・・・そんなことするわけないじゃん。大体怪我って言っただけでたいしたものじゃないし。それにジョンに噛まれるのは毎度のことだから、全然気にして無いよ。」

ああ、本当に気にして無さ。ただし、毎度毎度良い所で邪魔されるのには気にしてるけどな。

ちなみにうわさのジョンは罰として庭の犬小屋に鎖で繋がれて放置されている。ザマーミロだ！

そつと香澄ちゃんが巻いてくれた包帯に触れる。毎度毎度怪我したオレの手当てをしてくれるためか、彼女の包帯巻の技術は格段に上がっている。

だんだんオレの心も落ちついてきた。その時、ふとジョンの気持ち的理解できたような気がした。

「オレさ、なんとなくだけどジョンの気持ちかわかる気がする。」

え？と驚く香澄ちゃんにオレは話を続ける。

「あいつも男だからさ。やっぱり好きな女の子を別の男に盗られて嫉妬してるんだと思うよ。」

まあ、だからと言って奴には絶対に香澄ちゃんを渡さんが。

とその時、香澄ちゃんの愛らしい瞳からぼろぼろと雫がこぼれ落ちる。

「・・・私、ずっと不安だったんです。」

「か、香澄ちゃん？」

「捺矢君がそのうち私のこと、愛そうつかしちゃうんじゃないかって。」

「・・・・・・・・はいー！！！」

な、な、ちょ、ちよつと待ってくれ！！オレが何するって？

「いや、ありえないから。まあ、その逆ならあるかもしれないけど・
・」

うわぁー自分で言っというて悲しくなってきたー

でも本当だしなー香澄ちゃんもよくオレみたいな奴を見捨てない
で今も付き合ってくれるよ。

「だ・・・だって、いつもいつも私のせいで怪我させちゃって・・・

」

いやいやいや、あれは香澄ちゃんのせいじゃないから。全部ジヨ
ンのせいだから。

ああ、でも、そんな事、気にしてくれてたんだなあー。やっぱ、

香澄ちゃんは優しくて可愛い。

うわぁー、口元が自然とゆるむぞ。

「わ、笑い事じゃないです！」

本当に不安なんですよ！と涙目で頬を膨らませる姿もまた可愛い。
あんまりにも可愛過ぎて写真に撮りたいと思ってしまった。

香澄ちゃんが不安になるんだったら何度だって言ってやる。

「断言するけど、それは絶対にならないから。まあ、前も言った気がす
るけどさ。」

だが、まだ彼女の顔から『不安』が取り除かれていない。

これはよろしくない。オレはこんな顔よりも（この顔も可愛いけ
ど）笑っている顔の方が好きだ。

だからオレは想いを言葉にする。少しでも彼女の笑顔が見えるよ
うに。

「当然だろ？だってオレは香澄に惚れてるんだからさ。絶対にオレ
が君を嫌うことなんてないよ。」

あれ？正直にオレの気持ちと言っただけなのに、なんか香澄の顔
が赤くなってるぞ。

何故だ？なんか変なこと言ったか？

「あ、あの、わ、わたし、の、の、飲み物、持ってきます。」

え？ちよつと待って！！ていうか、なんか挙動不審になってるよ。彼女はよっぽど慌てていたのか、立ち上がるうとして失敗し、バランスを崩した彼女の体が倒れる。

オレはとっさに彼女を抱きしめ、自分の体を下にした――

壁は壊せば通れる その2（後書き）

長いのでここで切ります。

次回でこの話は終わります。

ご意見感想、誤字脱字等がありましたら拍手の方によりしく願います。

壁は壊せば通れるハズ・・・

「いつつ・・・」

危機一髪とはこのことか。オレは何とか自分の体を下にし、香澄ちゃんを守ることができた。ただし、背中と頭を打ったのか激痛がする。

とりあえず体を起こそうとしたが、右手首に激痛が走り失敗した。どうやら軽くひねったらしい。

まあ、そんなことは些細なものだ。重要なのは香澄ちゃんが無事かということだけだ。

「香澄・・・大丈夫か？」

どうやら無事な左手で体を支え、彼女の顔を覗き込む。すると、突然香澄ちゃんが怒った顔でオレを睨みつけた。

「『大丈夫か？』じゃないわよ！！大丈夫じゃないのは捺矢の方じゃない！」

あまりの怒りように茫然とした。えーと、オレってなんか香澄をここまで怒らせるようなことしたっけ？

でも、怒った顔も可愛いなあとおもうオレは相当イカレてきたかなあ。

「右手、怪我したんでしょ。私が無事でも捺矢が怪我したんじゃ意味がないじゃない！そんなの、嬉しくない。」

うお！気付かれてた。でもさ・・・

「それでもオレは香澄に怪我がなくてよかったと思ってるよ。」

心の底から、と心の中で付け足しておく。

ん？そう言えば今・・・

「捺矢って・・・初めて呼び捨てにしてくれた・・・よね？」

その言葉に香澄ちゃんの顔がまるでトマトのように真っ赤になる。泣いたり怒ったり赤くなったり・・・本当に可愛いなあ。

恥ずかしそうに真っ赤になった顔を背ける香澄にオレは何とか左

手だけで起き上がり、彼女の耳元に口を近づける。

「もう一度、呼んで。」

その時の香澄の顔はすごかった。

これ以上無いくらいに真っ赤になり、なんだか火でも拭きそうだ。触ったら火傷しそうなほど赤い。

しばらくの沈黙の後、ゆっくり彼女が口を開く。

「捺矢・・・・・・・・・・君。」

ガク・・・

こらこら、ちょっと待とうね。何で結局『君』付けなのさ！

「ちゃんと名前、呼んで。」

もう一度彼女の耳元で囁いてみる。

しばらくの間、香澄は真っ赤になった顔をオレの胸に押しつけ隠していたが、やがて小さい声で「捺矢」とオレの名前を、しかも呼び捨てで呼んでくれた。

ヤバイ。嬉しすぎる！！ニヤニヤが止まんねー

しかも香澄は可愛過ぎだし。そろそろ限界だな。さっきもおあずけを喰らったし。

「香澄。」

オレが名前を呼ぶと、彼女の体がわずかに震えたがそろそろと顔をあげ、オレを見つめる。

真っ赤な顔に潤んだ瞳。誘われている気がするのはい気のせいかな？まあ、いい。オレは左手で彼女の顎を持つ。オレの意図がわかったのか香澄はそっと目を閉じた。

そして、ゆっくり互いの顔を近づけ、触れるか触れないかという時・・・

「ただいまー！マイ、スイートリトルハニー？お父さんが帰ってき

たよー」

固まった。

そろそろつと声のした方へ首を回すと、部屋の入り口にアロハシヤツを着、サングラスをした、ごっつい顔というかそっち系の顔の中年男性が立っていらっしやいました。

と、とりあえず一言。

「お、お邪魔してます。」

そして待つこと数瞬……

「てめえー！うちの娘に何手え出し手やがるんじゃーこのボケが！東京湾に沈めたるうか！！」

うわぁー見た目も声もやくざって感じっすねえ。とか頭の片隅で思いながら、オレは天高く、お空の御先祖様の所まで吹き飛ばされたのでした。

「捺矢君！！」

香澄ちゃんがオレの名前を呼ぶのが聞こえてくる……なんか、凄まじいおっさんの怒鳴り声と一緒に。

オレの敵はまだいたのか……かなり手強いぜ。

ああ、オレはいつになったら心ゆくまま、香澄ちゃんと過ごせるのか……

次回に続く！！ 続く……よね？

壁は壊せば通れるハズ・・・（後書き）

結局、二人とも呼び名が戻ってしまいましたねえ。

さて、これにて番外1は終了です。

でも、『一目ボレ』は一応まだ続きます。

感想、ツッコミ、要望などなどがありましたら拍手の方からよろしくお願いします。

『ボク』と『あいつ』の出会い（前書き）

ジョン視点の話です。

ある日のジョンの回想です。

『ボク』と『あいつ』の出会い

「ジョン！てめえ、いい加減にしろよ！」

ボクに噛まれた右腕を抑えながら青年が睨みつけてくる。

「ジョン……お座り。」

ボクの愛する飼い主が悲しそうな顔で命令する。そんな顔、しないで欲しい。

仕方がないので、それに従うことにする。すると、ご主人様はボクの首に紐をつけ、あるうことかそのまま外に繋いだのだ！

「わん！わん！」

必至で中に入れてもらおうと吠えるが、ドアは一向に開かない。

代わりに聞こえてくるのは、ご主人様があの変態ヤローに謝罪する言葉だった。

『本当に、いつもごめんなさい。捺矢君。』

『いや！いつものことだしさ。それに香澄ちゃんが悪いわけじゃないんだから。頼むから、そんな顔しないでくれ。香澄ちゃんは笑っている顔の方がよく似合ってるんだからさ。』

いけない！このままではご主人様があの変態の餌食になってしま

う。何とかして助けねば！

しかし、どんなに引つ張っても紐は切れない。家の中から、二人が仲良く会話をしている声が聞こえる。

許すまじ、小杉捺矢！！

何とかしてご主人様を救わねば。ご主人様を助けれるのはこの世でボクだけだ！

そこで、紐に噛みつき、切ろうとする。が、なかなか硬くて切れない。

前科があつたせいか、どうやらさらに頑丈なものにしたみたい…

一体、どうしてこうなつたんだろう？

ボクは紐を噛みながら過去に思いを馳せた。

もう、親兄弟の顔なんて覚えていない。ただ、気がついたらペットショップのガラスケースの中にいた。

そして、あの日、あの時、すべてが始まった。あいつはボク目の前に現れて……

「か、かわゆい！」

そして、目を丸くするボクに向かって突っ込んできた。

「うおう！この毛並み、この柔らかさ……何て素晴らしいんだ！」
あろうことが奴は、この美しい毛並みにすりすりしてきた。

あの時全身に走った悪寒は、今でも思い出せる。そして奴は、ボクが茫然としているのをいいことに、ひたすら愛撫してくる。

はつきり言って、ヤローにやられても全然気持ち良くない。

「よし、決めた！お前は今日からジョセフィーヌだ。」

笑顔で見つめてくるこいつとは対照的に、ボクの顔はショックで固まっていたと思う。

その名前が女性名だということくらいは、生後数か月の子犬でも知っている。

一応念のために言わせてもらうなら、ボクはれっきとしたオス犬だ。決して、決してメス犬なんかじゃない。

「お金が貯まったら一緒に二人の愛の巣へ行こうな。」

こいつ、大丈夫か？なんか、目がうつとりしている気がする。

とりあえず身の危険を感じ、こいつの右手に向かって大きく口を開け・・・

ガブリ

「*@&%\$?¥!〒…」

声にならない変態の悲鳴が店内に響いた。

フンと鼻を鳴らし、軽やかに地面に降りる。そして、思いっきりあいつの足に向かってボクのをかけてやった。

再び奴が悲鳴を上げていたが知ったことではない。ボクをメス扱
いした罰だ。

これが天敵、小杉捺矢こすぎのりやとの最初の出会いであり、戦いのコングが
鳴り響いた瞬間であった。

女神との邂逅

あの変態はあれから毎日のようにペットショップに来ては、ボクを撫でまわす。

学校帰りだそうで、いつも制服とかいうのを着ていた。

はつきり言って鬱陶しい。いや、そんな言葉じゃ表現できないほどうざったい。

一応、毎回毎回、飽きもせず愛撫してくるあいつに、噛みついてやるのだ……。一向に懲りない。

そんな毎日にいい加減、疲れてきた。

しかし、それを癒す存在が現れたのだ！

今でも覚えている。雲ひとつ無い、青い空。女神は現れた。

彼女は『学生』だそうで、制服を着ていた。

ボクを見つけ、店主の許可を得ると、恐る恐る頭を撫でてくれた。その時ボクは彼女の香に感動した。

ああ、ほんと、なんていい匂いがるんだろう。あの変態とは大違いだ。甘くて、滑らかで、もっと嗅いでいたい気分させられるやがて、その手が離れ、物足りない気持ちになり、クーンと甘えるように鳴く。

それに対し、彼女は優しく、もうそれは天使のような笑みを送ってくれる。

そして「またね」と言っで、出て行ってしまった。

『またね』ってことはまた来てくれるのだろうか？それは、明日？それとも明後日？期待に胸を膨らませながら、彼女の匂いを思い出していた。ああ、幸せだ。

だけど、その幸せは長く続かなかった。

「会いたかったぜ！ジョセフィーヌ！」

またあいつが現れ、抱きしめてきた。

ふざけんなよ！あの子の匂いが消えちゃうじゃないか！

ボクは、包帯が巻かれている右手に向かって全身全霊をかけて…

ガブリ

「○ × § Θ Σ」

ふん！許可なく触ってくるからだ。ボクに触っていいのはあの女神だけ…

それから何度か彼女は会いに来てくれた。

そしてついに、彼女に飼われることが決まったのだ。

今でもあの時の喜びを覚えている。

でも、あの時のボクは知らなかった。

それがボクの愛する女神と変態を出会わせるきっかけになるということを。

やっぱり『あいつ』はバカだった

「ああ、そろそろあいつが来るころだな。」
「あいつ？」

女神がボクを引き取りに来た日、ペットショップの店長（名前は忘れた）がにやりと笑った。

「良かったな。これから面白いもんが見れるぞ。」

女神が不思議そうな顔で首を傾げた時、

「おじさん！ ジョセフィーヌを買いに来たぜ！」

「げ！ また来た。 って、 買いにつて何を？ 買いにつて。」

は！ ま、まさか、女神じゃなくて、あの変態の所に売られるんじゃないよね？

ボクは潤んだ瞳で女神を見つめる。でも、女神の瞳はボクではなく、あの変態を映している。

「あ、ちょうど今、売れちゃった。」

語尾にテヘツという言葉がつきそうな口調で店長が笑う。

「あとね。あの子、オスだから。」

その言葉に変態はシヨックを受けていた。

ちよつと待って！ 本気で今までメスだと思っていたのか？

「…………ぬぁに……………」

…………本気だったらしい。

ただの変態だと思ってたけど、どうやらただのバカのようなだ。

「面白いからほかつといたんだけど……本当にメスだと思ってたんだねえ。」

は、は、はつて、ちゃんと訂正してよ！

しかし、この悲痛な叫びは誰にも届かない。

「で？」

「で？」

「ジョセフィーヌはどこ？」

「そこ。」

ちよつと、指を指さないで！という心の叫びは誰にも通じず、変態がすごい形相で見つめてきた。

「ジョセフィーヌ！」

なんか、空飛びながら向かって来るのですが…

怖くなったので、今日もまた、奴の右腕に…

ガブリ

「？・・・。ΘΣ □！！」

ふん！ボクに触れていいのは女神だけなんだから。

やっぱり『あいつ』はバカだった（後書き）

ペットショップの店長の名前は静寂貞春しじまさはるです。覚えている人はいる
でしょうか？

ボクの女神の優鬱 前編

それからもうひたすら幸せな日々だった。

毎日のように女神に抱きしめてもらえ、一緒に散歩に行ける。これを幸せといわずに何を幸せというのか！

ただ一つ気にかかる点があるとしたら、それは我が女神ことご主人様の憂いを帯びた顔だ。

一体、何を悩んでいるのだろうか。ご主人様に一番近いボクにも相談できないことなの？

何とかして彼女を元気づけさせたい！

そこで、散歩途中、ぺろぺろと彼女の顔を舐める。

「あはは！くすぐりたいよ、ジョン。」

楽しそうに笑うご主人様に満足していると…

「ジョ、ジョセフィーヌ！」

なんか、嫌な予感がする……

恐る恐る声のした方を見る。動物の勘はよく当たる。

恐れていた通り、変態が、こっちに向かって飛んでくる。

このままではボクとご主人様の幸せな時間が壊される！そんな危機感を抱いた。

そこで、「わおーん」と奴の元に向かう。そして、奴の右手に狙いを定め……

ガブリ

「○× □！」

ふん！何人たりとも、ボクとご主人様との時間は邪魔させないん

だから。

だけど、この後このことを後悔することになる。

ボクがこんなことをしなければ、あんなことにはならなかった。いや、もっと優しく噛めば良かったんだ。そしたら、ご主人様が、当然の報いを受けて怪我をした変態を家にまで連れてこなかっただろくに…でも、

「認めんぞ——————」

ご主人様がお茶を用意した終わった時、変態は突然訳の分からないことを叫びながら出て行った。

一体何をどういう流れになったらそんな言葉が出てきたのだろうか？ご主人様は普通に手当てをしてあげて、普通にお茶を出していただけなのに。

「あ……」

後に残されたご主人様は悲しそうに肩を落としていた。

ボクの女神の優鬱 前編（後書き）

後編（もしくは中編）に続く！

ボクの女神の優鬱 中編

次の日、散歩から戻る途中、嫌なにおいを感じ取り、家に帰るのになかった。

「どうしたの？早く帰るよ。」

ご主人様に急かされ、歩き出す。けど、嫌な臭いは家に近づくと濃く香ってきた。

「わんわん、きゃーいん！！」

ボクは必死にご主人様を止めようとする。だが、まだ子供なボクではご主人様の力に勝てるはずもなく、家に着いてしまった。

そして、見つけてしまったのだ。玄関の前で怪しげな動きをした男を……

「あ、小杉さん。」

ビク！と変態の体が震えた。む？なんか、ご主人様、嬉しそうな顔をしてませんか？

むーん、許せん！変態の分際で性懲りもなく再びご主人様の家にやってこようとは！

いい加減思い知らせてやる！

ボクは奴のお尻に照準を合わせ……

がぶり

「○× □* \$%&!」

ふん！自業自得だ。だのにご主人様は焦った様子で変態に近づき・

・

「ご、ごめんなさい！」

なんと！今にも土下座をせんばかりに謝ったのだ。それが気に食わなくてさらに深く噛みつく。

「ぎゃふぁー！」

だけどそれが逆効果だったらしい。ご主人様はこいつを家の中に入れ、ボクの説得にかかった。

だが、何を言われようが離れなかった。ここで離れたらボクはこの変態に負けたことになる！

どれくらい時間がたっただろうか。

なかなか離れ無いことに焦れてきたのか、ご主人様の口からとんでもない言葉が出てきた。

「ジョンは私のこと嫌いなね。だったら、その人と一緒に帰りなさい。」

冗談じゃない！ボクの居場所はご主人様の傍です。こんな変態となんて一秒たりとも一緒にいたくない！！

ボクは慌てて変態から離れ、ご主人様の所に飛びつく。

そして、数瞬後。

「認めんぞーーーーーーー」

また、奴は意味不明なことを叫びながら出て行った。

「あ、待って……………はあ。」

ご主人様はしばらくの間、あいつが出て行った方を見つめ、肩を落とした。

ボクの女神の優鬱 中編（後書き）

少し長いのでやっぱり3つに分けました。次回で最終話になります。
もうしばらくお付き合いをお願いします。

ボクの女神の優鬱 後編（前書き）

無茶苦茶短いです・・・でも、これでラスト

ボクの女神の優鬱 後編

それから数日後、ご主人様の従兄とか名乗るのが家に来た。

「実君。あのね、相談があるの・・・」

その相談内容を聞いて心臓が止まるかと思った。その内容とは、あの変態のことだった。

なんでよりによってあいつなの？
ボクじゃダメなの？

が、その時、従兄がボクの頭を優しく叩くと、黒い笑みを浮かべた。

「一緒に邪魔しような。」

その言葉で理解した。彼は同士なのだということを。

あとでわかったことだけど、彼はどうやらあの変態の友達らしい。そして、ついにあの日が訪れた。

な、何と我がご主人様とあの変態がデートとかいうものをするらしい。

これは何としても邪魔をしなくては。

従兄の協力を得て、ありとあらゆる手段で変態と戦った。戦ったのだが・・・

あんまりにも酷い怪我を負わせた罰で、紐につながれ、家の外に

出されてしまった。

くやしくて、思いつきり変態を睨みつける。

でも、今の変態の目にはご主人様しか映っていない。これだけ殺気立たせているのに、全然気づいてくれない。

その上、二人の距離がどんどん縮まっていく。

やばい！このままでは二人がくつついてしまう。それだけは回避しなくては。

何とかして紐を噛み千切ると、ボク専用のドアから家の中に入る。そして、奴の右足に向かって思いつきり噛みついた。

奴は、恨みがましげな眼で睨んでくるけど知ったことじゃない。

そして、この日もまた、奴の悲鳴が鳴り響いたのだった。

ああ、もう！あの頃のことを思い出すと腹が立つてくる！

このままじゃ、あの時邪魔した意味がなくなっちゃう。絶対に負けるもんか！

ボクは何とか紐を噛み切って、家に入る。そして、奴に向かって力の限り噛みついた。

悲鳴が響き、ご主人様が何か言っているようだが、知ったことではない。ボクは満足げに奴から離れる。そして、ご主人様の膝の上で今日も丸くなった。

ボクの女神の優鬱 後編（後書き）

とりあえず番外2の『ボク』と『あいつ』の戦闘日記はこれで終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0455r/>

一目ボレ ～オレと『彼女』の奮闘記～

2011年7月24日03時38分発行